達成動機づけにおける重要な他者の果たす役割

―日本と韓国の比較研究―

執筆者一覧

伊藤忠弘　学習院大学文学部准教授

上淵　寿　東京学芸大学教育学部准教授

藤井　勉　学習院大学文学部助教

大家まゆみ　東京女子大学現代教養学部准教授

目　次

第１章　研究の概要ー研究目的と方法ー …… 1

第２章　日本と韓国における各尺度の回答傾向 …… 9

第３章　自己・他者志向的動機への態度と諸変数の関連 ……27

第４章　韓国の学生と日本の学生における達成目標の差異……37

第５章　高校時代の教師からの期待が達成目標志向性に及ぼす
影響の日韓比較ー教師の厳格さ，温かさの認知を調整
要因とした検討ー ……43

第６章　大学生の対人関係と動機づけに関する日韓比較
ー就業動機はどのように規定されるのかー……55

引用文献 ……65

第1章
研究の概要
―研究目的と方法―

伊藤忠弘

研究の背景

2002年に導入された新学習指導要領で学力だけでなく「意欲・関心・態度」といった側面も評価の対象となってから久しいが，現在でも引きこもり，アパシー，ニートといった社会的な問題について，意欲や動機づけと結びつけて議論されることが多い。目標や課題に積極的に関与して成し遂げるという一連のプロセスを対象とした達成動機づけ研究に重大な影響を与えてきたものに，内発的動機づけとその流れを引き継いだ自己決定理論の一連の研究がある。初期の内発的動機づけ研究では，報酬の統制的な側面が行為者の活動に対する興味を失わせ，内発的動機づけを阻害するという「アンダーマイニング現象」が見いだされた。さらに初期の自己決定理論は，人が本来「有能さへの欲求」と「自律性への欲求」を有しているとし，目標や課題に対して行うことを自らが決定している（できる）という自己決定性あるいは自律性の感覚が，その活動の動機づけにおいて重要であることを主張してきた。簡単に言えば，私たちは自分で選択した課題や自分でやると決めた活動においてこそ努力を重ねるということになる。

しかし私たちの達成行動は「真空状態」でなされるものではなく，周りに常に他者が存在している。ある課題を達成するという一見プライベートな活動であっても，それを評価する他者，同じ課題を一緒に行っている他者，自分の遂行のできを評価する際に比較基準となる他者，そして課題達成を期待し応援する他者が周囲にいて，私たちの達成行動はこれらの他者の影響を受けている。自己決定理論をはじめとする従来の達成動機づけの研究では，周囲の他者の果たす役割について，報酬や罰をコントロールしたり，遂行の評価者であったり，比較の基準であったりと，動機づけへ及ぼす否定的な側面，特に内発的動機づけを阻害する面が強調されてきたと言える。

これに対して，「最も努力した出来事」について大学生に対して行った面接調査からは，達成行動に対して他者が果たすポジティブな側面もまた多く指摘されている（伊藤，2012）。実際，先日行われたロンドン・オリンピックで活躍した日本選手のコメントに

おいて，「誰々のおかげ」，「恩返し」，「感謝」といった言葉が頻繁に登場したという印象を受けることからも，周囲の他者が動機づけに果たす肯定的な影響が決して小さくないことは明らかである。

このような他者の影響を受けて動機づけが維持されあるいは強められる過程の1つの側面として，東（1994）は「他者志向的動機」を日本人の動機づけの特徴として指摘した。「他者志向的動機」は，「自己決定的でありながら，同時に人の願いや期待に応えることを自分に課して努力を続けるといった意欲の姿」と定義され，動機づけを促進する重要な他者の役割に注目する。

東（1994）の「他者志向的動機」はアメリカとの比較のなかで指摘された概念であるが，近年の文化心理学では「文化と心の相互構成」という観点から，欧米で指摘された現象や理論についての文化的再検討を行っている。例えばIyengar & Lepper（1999）は，母親によって選択された課題に対する動機づけを，ヨーロッパ系の子どもとアジア系の子どもで比較した。他者によって選択され自分に選択の余地がない課題では，自己決定理論に従えば自分で選択した課題と比較して動機づけは低くなることが予想され，実際にヨーロッパ系の子どもは実験者の選択した課題と同じ程度に母親の選択した課題では動機づけが低かった。しかしアジア系の子どもは，母親の選択した課題でも自分が選択した課題と同じ程度に動機づけが高く維持されることが見いだされた。

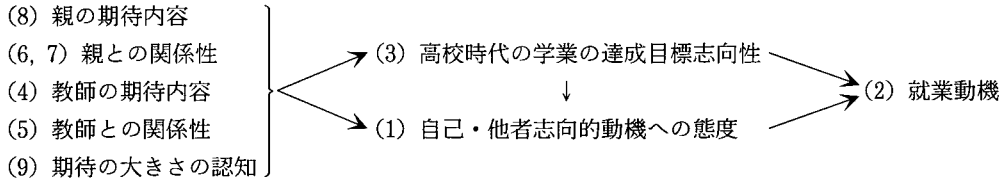
このような結果は自己決定理論や自律性に関連した現象が，欧米以外の社会では必ずしも十分に当てはまらない，あるいは確認できないことを予想させる。その意味で，アジア地域でも欧米の研究知見と対応するような結果がどこまで得られるのか，もし異なるとすればどのような点がアジアに特徴的なのか，また「他者志向的動機」といった概念を用いて同じアジア地域の他の国の人々の動機づけを説明することは有効なのか，といった問題を検討することは重要となろう。

しかし同時に，欧米とアジアという二分法は文化的差異を検討する1つの枠組みでしかない。先の文化心理学では，自己ないし人のとらえ方に着目して，欧米に代表的な「相互独立的自己観」と東アジアや南アメリカに代表的な「相互協調的自己観」を対比させて捉えることが一般的である。実際，「他者志向的動機」の「他者」とは「強い相互依存で結ばれた親，家族，その他身近な人々」とされ（東，1994），このような家族間の強い結びつきは欧米と比較してアジアや南アメリカで顕著に認められると考えられているが，同じアジアのなかでも儒教的な考え方の影響の強い地域では，他者志向的動機が達成行動を促す強力な要因となりうることも予想される。

本研究の目的および仮説

そこで本研究では大学生を対象に，重要な他者として親と教師を取り上げ，その関係性と期待する内容と期待の大きさの認知が，学業における達成目標志向性と自己・他者志向的動機への態度を媒介して，将来の職業に対する就業動機に及ぼす影響を検討する。

本研究の作業仮説として以下の因果モデルを仮定している。なお（　）内の数字は以下の「研究方法」で説明する質問紙の番号に対応している。



本研究では，従来の研究で用いられてきた尺度を基に，さらに他者との関係性に基づく内容の項目を積極的に含めることとした。例えば，達成目標志向性については「遂行接近目標」と「社会的承認目標」を区別した。また就業動機については社会に役立つ仕事を志向する「貢献志向」や他者から高く評価される仕事を志向する「評価志向」の項目を加えた。これによって，親や教師の期待や関係性が動機づけに及ぼす影響をより詳細に検討しようとした。

また相互協調的自己観を保持すると仮定される東アジアでは，重要な他者との関係性が達成場面で重大な影響を与えると示唆されるが，他者志向的動機に基づく他者からの期待や責任の意識は達成動機づけに肯定的にも，プレッシャーや罪悪感を感じさせることで否定的にも，作用することが予想される。本研究では韓国との比較も行うが，他者志向的動機に関連する知見が，日本と同じく相互協調的自己観を持つと仮定される韓国においても認められるかどうかを検討する。韓国では，儒教思想の影響が根強く残り，親や教師といった年長者を尊重することや，学歴をめぐる受験競争の圧力が強いことが指摘されている。ここから (1) 親からの期待やプレッシャーの認知が高いこと，(2) 他者志向的動機についてもその態度については肯定と否定の両面が意識されていること，(3) 他者志向的動機と他の動機づけの側面の関係が日本以上に強いことが予想される。

研究経過

（1） 日本語版質問紙の作成（2011年7月～9月）

関係性に基づく達成動機づけの様態を明らかにする質問紙作成のため，主要な研究論文，文献をレビューし，日本において妥当性がある程度保証されている尺度を中心に検討と選択を行った。今回の研究では国際比較に耐えうるデータ数を確保しやすいという理由から調査対象を大学生に絞り，さらに大学生の達成動機づけに影響を及ぼしうる重要な他者として，親および高校の教師を対象とすることにした。さらに達成目標志向性を測定する達成行動として現実的な制約と応用的な観点から高校時の学業場面を想起させることと，高校時代の教師についての質問を含むことから，高校卒業から間もない1年生を中心に調査を実施することを確認した。最終的に先の因果モデルの各要因に対応する9つの尺度から成る質問調査用紙を作成した。

（2） 韓国語版質問紙の翻訳（2011年10月～12月）

日本に留学している韓国人に対して日本語版質問紙の韓国語への翻訳を依頼した。さらにその韓国版の翻訳をさらに韓国で韓国語を勉強している日本人および日本語を勉強している韓国人に日本語への再翻訳を依頼するというバックトランスレーションの手続きを実施した。その上で最初の日本語版と対照し，細かい表現のずれについて検討，修正を行った。

（3） 日本におけるデータ収集（2011年11月～12月）

首都圏にある6つの大学の，1年生の受講者が多い心理学関連の授業において質問紙調査を実施した。基本的に今回のプロジェクトの研究員が直接説明，配布，回収を行ったが，一部については質問紙を郵送し，授業担当教員に実施を依頼した。2012年1月に日本のデータについて分析を開始し，協力いただいた研究参加者に対して結果の一部を報告した。

（4） 韓国におけるデータ収集（2012年3月）

韓国の誠信女子大学校の安平鎬教授に韓国での調査のコーディネーターを依頼，質問紙を郵送し，4つの大学で調査を実施した[1)]。

1) 今回の調査は安平鎬先生のお力添えとお心遣いがなければ実現していませんでした。この場を借りて改めてお礼申し上げます。

研究方法

●質問紙の構成

（1）　**自己・他者志向的動機への態度**　これまでの先行研究（伊藤，2010他）の因子分析の結果に基づいて，「自己志向的動機の重視」，「他者志向的動機の重視」，「他者志向的動機の否定的側面の認知」，「他者志向的動機の自己志向的動機への還元」，「自己・他者志向的動機の統合」の5つの下位尺度を想定して，因子負荷量の高い項目から各5項目ずつ選択し，計25項目で構成された。

（2）　**就業動機尺度**　安達（1998）では「挑戦志向」，「対人志向」，「上位志向」を見いだしているが，伊藤（2009）では社会に役立つ仕事をすることを求める「貢献志向」の項目を追加し，他者志向的達成動機との関連を確認している。本研究でも，「貢献志向」と，さらに他者から賞賛され評価されるような仕事をしたいとする「評価志向」を加えた5つの下位尺度を想定し，安達（1998）や伊藤（2009）を参考に各3項目ずつ，計15項目の尺度を作成した。

（3）　**高校の授業における達成目標志向性**　田中・藤田（2003）は，「マスタリー目標」，「遂行接近目標」，「遂行回避目標」の3つの下位尺度を構成している。この「遂行接近目標」には，他者と比較して優れた成績を得るという目標と，他者に自分の能力を示し他者から高い評価を得ようとする目標の双方が含まれている。基準という観点で考えると，他者の遂行を自分の遂行の評価基準として用いるか，それとも他者から見た自分の評価を自分の遂行の評価として取り入れるかの違いがある。これまでの研究でもこの両者を区別した研究が見られ，概念的には区別できることから，本研究では両者を区別して，「マスタリー目標」，「遂行接近目標」（比較基準として他者を扱う目標），「遂行回避目標」，「社会的承認目標」の4つの下位尺度を想定した。社会的承認を求める他者としては友人と教師を想定した。田中・藤田（2003）を参考に新たに「社会的承認目標」の項目を加える形で各5項目ずつ計20項目を作成した。

（4）　**教師の期待する内容の認知**　高校時代の教師を思い浮かべて，後述の（8）の親の期待する内容の認知に関する項目を参考に，「交友関係」，「成績」，「社会性」，「マスタリー」，「規範習得」，「自己実現」の6つの領域を仮定して，各3項目ずつ計18項目を独自に作成した。

（5）　**高校時代の教師との関係**　後述する（6）と（7）の親の養育態度を調べる項目を参考にして，同様の「受容性」と「自律性」を想定して独自に各4項目ずつ計8項目

を作成した。

（6） **父親の養育態度** Parental bonding instrument 日本語版（小川，1994）から抜粋した「受容性」を測定する4項目と「自律性」を測定する4項目の計8項目から成る。「高校時代の頃までの，あなたの父親」を思い浮かべて回答させた。

（7） **母親の養育態度** (6) と同じ項目を，同様に母親を思い浮かべて回答させた。

（8） **親の期待する内容の認知** 河村（2003）では，「進学・学業期待」，「社会への適応期待」，「就職期待」，「従順・見栄期待」，「苦労への報い期待」の5つの因子を抽出している。伊藤（2011）では河村（2003）の項目と親の期待する内容についての面接調査を参考に51項目を作成し，「良い大学・良い就職」，「社会的受容」，「自己実現」，「親孝行・見栄」，「勉強・同居」，「人並み・普通」の6つの下位尺度を見いだしている。本研究では，「良い大学・良い就職（社会的成功）」，「社会的受容」，「自己実現」，「親孝行」の4つに，自分の子どもを自慢したい「見栄」に対応する「反映的評価」を加えた5つの下位尺度に各4項目ずつ計20項目を作成した。

（9） **親・家族，友人，教師からの期待の大きさの認知** 各対象から期待されていると感じるかどうかをそれぞれ1項目で直接を尋ねた。

質問冊子は上記の (1)～(9) の順番で並べ，表紙を含めて7ページで構成された。表紙には，研究目的の説明，回答にあたっての注意事項，プライバシーの保護の仕方，研究協力者の権利についての説明を記載した。そして所属大学名，年齢，性別の記載欄を設けた。回答は研究協力者の回答のしやすさを考慮して，すべて6件法に統一した。程度の差異を尋ねる質問では，「まったく」，「ほとんど」，「あまり」，「少し」，「ある程度」，「とても」（あてはまる，そうである，そう思っていると感じる）の表現を用いた。

● 研究協力者

日本では，学習院大学（250名），東京大学（216名），早稲田大学（94名），帝京大学（43名），明星大学（48名），文京学院大学（84名）の大学生735名が協力に同意し，質問紙に回答した。男性382名，女性351名，不明2名であった。いずれも心理学に関連した一般教養課程の授業科目を受講している学生であった。

韓国では，ソウル大学（155名），高麗大学（147名），祥明大学（77名），誠信女子大学（184名）の大学生563名が協力に同意し，質問紙に回答した。男性176名，女性386名，不明1名であった。

第2章と第3章の分析では，30歳以上の5名（日本3名，韓国2名）を分析から除外した（年齢未記入者は分析に含めた）[2]。日本では平均年齢19.22歳（SD: 1.05），韓

国では20.87歳（SD: 2.24）となり，韓国の研究協力者の方が年齢がやや高く，散らばりも大きい。

●実施手続き

授業時間の一部を利用して実施し，回収した。所要時間は10〜20分程度であった。日本での調査は本プロジェクトの研究員が基本的に事前の説明，配布，回収を行った（帝京大学のデータは実施時間の都合から質問紙を郵送し，説明から回収までを担当教員に依頼した）。また必要に応じて研究結果のフィードバックについても約束した。韓国での調査は誠信女子大学の日本語学専攻の教員を通して，各大学へ実施の依頼を行った。

第2章以降で作業仮説に基づいて分析を行った結果を記す。第2章では各項目の回答傾向と質問紙作成時の想定に基づいた下位尺度得点について日韓の結果を比較し検討する。第3章では，媒介要因としての「自己・他者志向的動機への態度」の有効性について，他の尺度との相関に基づいて検討する。第4章では親の養育態度と期待する内容が達成目標志向性に及ぼす影響を検討する。第5章では教師の態度と期待が達成目標志向性に及ぼす影響を検討する。第6章では達成目標志向性が就業動機に及ぼす影響を検討する。第1〜3章は伊藤，第4章は上淵，第5章は藤井，第6章は大家がそれぞれ担当する。

2）第4〜6章では5名を除かない全体のデータで分析を行っている。

第2章
日本と韓国における各尺度の回答傾向

伊藤忠弘

第2章および第3章では各項目の評定値および質問紙作成時の想定に従って構成された下位尺度得点を用いて分析を行う（第4章以降では，各尺度について改めて因子分析を行った結果に基づいて構成された下位尺度の得点を扱っている)。

分析方法

（1） 各尺度の項目ごとに2（国：日本・韓国)×2（性別：男性・女性）の分散分析を実施した。
（2） 尺度によっては，平均評定値の項目の差異についてグラフに示すことにより全体的な傾向を確認した。
（3） 各下位尺度得点について同じく2×2の分散分析を実施した。
（4） 下位尺度間の相関を検討した。

以降，各尺度ごとに分散分析の結果については0.1%水準で有意な結果を中心に記載する。

自己・他者志向的動機への態度

25個の項目のうち10個の項目で国の主効果が0.1%水準で有意となった。このうち，「他者志向的動機の重視（表では他者志向と略記)」に含まれる2項目（「『周りの人のために』という方が頑張りやすい」など）と「他者志向的動機の否定的認知（他者否定)」に含まれる3項目（『周りの人のために頑張る』というのは，『失敗できない』という過度のプレッシャーを生むことになる」など）では，日本の評定値が高かった。一方，「自己志向的動機の重視（自己志向)」に含まれる3項目（「『自分のため』を優先にした方がいいと思う」など）と「他者志向的動機の重視」に含まれる2項目（「自分の満足感のためだけにひたすら一つのことに打ち込んでいる人がいたら，それはとても孤独な

ことだと思う」など）では，韓国の評定値が高かった。

また4個の項目で性の主効果が0.1%水準で有意となった。「自己・他者志向的動機の統合（統合）」に含まれる2項目（「応援してくれる人のために頑張るという感情は，その人の喜ぶ顔・しぐさが見たいからという思いと，ほぼ重なるものである」など）と「結局は『自分のため』にという風に考えられないと高いモチベーションをもって取り組むことは難しい」，「『周りの人のために頑張る』というのは，『失敗できない』という過度のプレッシャーを生むことになる」で女性の評定値が高かった（Table 2-1）。

Table 2-1　自己・他者志向的動機への態度の各項目の平均評定値

		下位尺度	日本 男性 *M*	日本 男性 *SD*	日本 女性 *M*	日本 女性 *SD*	韓国 男性 *M*	韓国 男性 *SD*	韓国 女性 *M*	韓国 女性 *SD*	主効果 国	主効果 性	交互作用
1	「周りの人のために頑張る」と思いながらやると，義務感と見返りを期待する気持ちがうまれる	否	4.24	1.24	4.22	1.05	4.10	1.09	4.18	1.02			
2	周りの人のために頑張ったとしても，その人が喜んだりしてくれることが，結局は自分の満足感につながるものである	統	4.74	1.09	4.97	0.88	4.60	1.02	4.77	0.96	*	**	
3	自分の満足感のためだけにひたすら一つのことに打ち込んでいる人がいたら，それはとても孤独なことだと思う	他	2.57	1.35	2.68	1.18	3.17	1.49	2.98	1.36	**		
4	モチベーションが下がったときに，「周りの人のため」というのを支えにすることがある	他	3.65	1.39	3.59	1.23	4.07	1.28	3.76	1.22	**		
5	「両親や先生のために頑張る」というのは，彼らを喜ばせている自分が好ましいと考えているにすぎない	還	3.62	1.26	3.65	1.17	3.55	1.21	3.60	1.08			
6	結局は「自分のため」にという風に考えられないと高いモチベーションをもって取り組むことは難しい	自	3.72	1.41	3.90	1.18	3.71	1.35	4.09	1.29		**	
7	「周りの人のために頑張る」という言い方は，周りの人にとって自分が意味ある存在であることを確認したいという気持ちがあるように思える	還	4.17	1.26	4.08	1.15	4.22	1.05	4.11	1.21			
8	「周りの人のために頑張っている」と思うことによって，「自分のためにがんばっている」と思うよりも甘えがなくなると思う	他	3.46	1.35	3.54	1.17	3.65	1.24	3.57	1.13			
9	「周りの人」というのは始めから目的とするものではなく，結果に付随してくるものだと思う	自	3.71	1.27	3.69	1.04	3.55	1.19	3.82	1.14			
10	周りの人が喜ぶことで自分の存在意義を感じることがある	統	4.47	1.19	4.65	1.04	4.34	1.00	4.44	1.03	*		
11	「周りの人のために頑張る」という考え方は，結果がでないと「申し訳ない」と思ってしまい負担である	否	4.07	1.23	4.11	1.11	4.02	1.10	4.21	1.16			
12	「周りの人のため」は「周りの人が喜ぶと自分も嬉しいから頑張る」ということである	統	4.26	1.20	4.59	1.07	4.35	1.05	4.25	1.06	*	*	*
13	「周りの人のために」という方が頑張りやすい	他	3.57	1.34	3.61	1.30	3.05	1.18	3.01	1.10	**		
14	「周りの人のために頑張る」ということは，「人からよく思われたい」「人の期待を裏切って悪く思われたくない」という思いにつながっている	還	4.31	1.23	4.28	1.09	4.37	1.08	4.40	1.08			

		下位尺度	日本 男性 M	日本 男性 SD	日本 女性 M	日本 女性 SD	韓国 男性 M	韓国 男性 SD	韓国 女性 M	韓国 女性 SD	主効果 国	主効果 性	交互作用
15	周りの人のために頑張ることは，自分の深い次元での喜びが生まれるということだと思う	統	3.61	1.22	3.80	1.05	3.83	1.04	3.90	1.10			
16	「自分のため」を優先にした方がいいと思う	自	3.89	1.24	3.85	1.07	4.22	1.19	4.62	1.10	**		*
17	「周りの人のために頑張る」ということは「自分のために頑張る」という考えに比べてハイリスク・ハイリターンだと思う	否	3.30	1.35	3.61	1.12	3.02	1.30	3.14	1.15	**	*	
18	最終的な結果から考えると「周りの人のため」の方が高い成果を得られると思う	他	3.43	1.28	3.45	1.14	3.17	1.31	2.91	1.11	**		
19	「周りの人のため」に頑張るというのは，周りの人の期待がなくなった時，やる気がうせてしまうのではないかと思う	否	4.08	1.23	4.19	1.01	3.61	1.16	3.80	1.13	**		
20	「周りの人のために頑張る」とはいってもそれは自己満足のためのように感じる	還	4.17	1.21	4.26	0.97	3.95	1.08	4.31	1.02		*	
21	「周りの人のために頑張る」というのは，「失敗できない」という過度のプレッシャーを生むことになる	否	3.86	1.21	4.08	1.02	3.50	1.17	3.89	1.13	**	**	
22	自分のために頑張るというやり方でなければ自分を上昇させられない	自	3.25	1.28	3.34	1.13	3.29	1.27	3.71	1.26	**	*	
23	「周りの人のために」でいう「周り」はあくまで支えであり，目的とはなりえないと思う	自	3.64	1.30	3.72	1.10	3.70	1.34	4.11	1.24	**	*	
24	周りの人のために頑張るのは結局は自分を人に肯定してもらいたいということであって自分のためでもあると思う	還	4.43	1.04	4.55	1.00	4.45	1.00	4.53	0.98			
25	応援してくれる人のために頑張るという感情は，その人の喜ぶ顔・しぐさが見たいからという思いと，ほぼ重なるものである	統	4.50	1.06	4.72	0.95	4.42	1.02	4.62	0.97		**	

下位尺度　自：自己志向　他：他者志向　否：他者否定　還：還元　統：統合；有意水準　**：$p<.001$　*：$p<.01$

5つの下位尺度では，「自己志向的動機の重視」において主効果が認められ（$F(1, 1245)=24.76$, $p<.001$），韓国の方が得点が高かった。「他者志向的動機の否定的認知」においても主効果が認められ（$F(1, 1265)=30.47$, $p<.001$），こちらは日本の方が得点が高かった。また「自己志向的動機の重視」，「他者志向的動機の否定的認知」，「自己・他者志向的動機の統合」で性別の主効果が0.1%水準で有意であり（Fs>13.18, $p<.001$），いずれも女性の方が男性より得点が高かった。さらに「自己志向的動機の重視」では1%水準で交互作用も有意であり（$F(1, 1245)=9.35$, $p<.001$），韓国の女性（$M=20.37$）が韓国の男性（$M=18.51$）および日本の男女（$M=18.23$, 18.52）よりも得点が高かった（Table 2-2）。

下位尺度間の相関では，「自己志向的動機の重視」と「他者志向的動機の重視」の間に負の相関，「他者志向的動機の重視」と「自己・他者志向的動機の統合（還元）」，「他者志向的動機の否定的認知」と「他者志向的動機の自己志向的動機への還元」の間にそれぞれ正の相関が認められた。日韓の差異としては，「自己志向的動機の重視」が日本

Table 2-2　自己・他者志向的動機への態度の下位尺度の平均評定値

	日本			韓国			男性		女性		主効果		交互作用
	M	*SD*	α	*M*	*SD*	α	*M*	*SD*	*M*	*SD*	国	性	
自己志向	18.37	4.10	.71	19.80	4.53	.78	18.31	4.44	19.47	4.21	**	**	*
他者志向	16.77	4.38	.71	16.57	4.33	.75	16.83	4.74	16.58	4.05			
他者否定	19.85	3.53	.57	18.91	3.40	.54	19.12	3.81	19.70	3.23	**	**	
還　元	20.76	3.91	.71	20.84	3.38	.61	20.67	3.85	20.89	3.56			
統　合	22.14	3.91	.77	21.83	3.69	.76	21.56	3.94	22.35	3.69		**	

有意水準　**：$p<.001$　*：$p<.01$

Table 2-3　自己・他者志向的動機への態度の下位尺度間相関

	自己志向	他者志向	他者否定	還　元	統　合
自己志向		−.44	.16	.20	−.30
他者志向	−.33		.18	.03	.47
他者否定	.19	.28		.43	.24
還　元	.31	.10	.46		.23
統　合	−.16	.43	.30	.38	

右上が日本，左下が韓国

では「自己・他者志向的動機の統合」と負の相関が高いのに対して，韓国では「他者志向的動機の自己志向的動機への還元」と正の相関が高かった。さらに韓国では「他者志向的動機の自己志向的動機への還元」と「自己・他者志向的動機の統合」の正の相関が高かった（Table 2-3）。

就業動機

各項目について分散分析を行ったところ，「挑戦志向」に含まれる3項目，「評価志向」に含まれる「周りから賞賛されるような仕事をしたい」，「家族に喜んでもらえるような職業に就きたい」，さらに「世の中の役に立つような仕事がしたい」，「職場では高い役職に就きたい」の計7項目で0.1%水準で国の主効果が認められた。いずれも韓国が日本よりも高い動機を保持しているという結果であった。また「仕事を通じて色々な人に出会いたい」，「給料のよい職業に就くことは充実した生活に欠かせない」，「家族に喜んでもらえるような職業に就きたい」については女性の評定値が高かった。交互作用は認められなかった（Table 2-4）。

項目間の差異を検討すると，日本では「対人志向」や「貢献志向」の項目の評定が高く，「困難な仕事でも人に助けを借りずに自分の力でやり遂げたい」，「職場では高い役

Table 2-4　就業動機の各項目の平均評定値

		下位尺度	日本 男性 M	日本 男性 SD	日本 女性 M	日本 女性 SD	韓国 男性 M	韓国 男性 SD	韓国 女性 M	韓国 女性 SD	主効果 国	主効果 性	交互作用
1	困難な仕事でも人に助けを借りずに自分の力でやり遂げたい	挑	3.68	1.22	3.65	1.12	4.35	1.17	4.19	1.06	**		
2	世の中の役に立つような仕事がしたい	貢	4.56	1.24	4.63	1.14	4.97	1.13	4.87	1.03	**		
3	仕事を通じて色々な人に出会いたい	人	4.64	1.24	4.99	1.08	4.80	1.17	4.90	1.04		**	
4	昇格や昇進の機会がある仕事を得ることは重要だ	上	4.47	1.21	4.41	1.11	4.61	1.22	4.62	1.13	*		
5	給料のよい職業に就くことは充実した生活に欠かせない	上	4.36	1.23	4.55	1.04	4.39	1.18	4.68	1.07		**	
6	みんなに期待されるような仕事がしたい	評	4.29	1.21	4.26	1.16	4.40	1.19	4.37	1.18			
7	常に多くの人との出会いがある仕事がしたい	人	4.24	1.33	4.45	1.24	4.17	1.33	4.18	1.23	*		
8	社会的に有意義な仕事がしたい	貢	4.61	1.24	4.77	1.06	4.99	1.00	4.85	1.04	*		
9	努力や能力を必要とする仕事がしたい	挑	4.50	1.18	4.49	1.02	5.02	0.89	4.87	0.94	**		
10	社会に貢献できるような職業に就きたい	貢	4.55	1.29	4.62	1.13	4.89	1.09	4.69	1.11			
11	職場では周りの人々との調和が何よりも大切だ	人	4.58	1.15	4.79	1.05	4.84	0.95	4.90	1.03	*		
12	周りから賞賛されるような仕事をしたい	評	4.24	1.26	4.22	1.15	4.66	1.06	4.78	1.06	**		
13	職場では高い役職に就きたい	上	4.07	1.35	3.69	1.23	4.60	1.27	4.57	1.20	**	*	
14	仕事で成功するためには決して努力を惜しまない	挑	4.38	1.09	4.32	1.04	4.99	0.90	4.71	0.98	**		
15	家族に喜んでもらえるような職業に就きたい	評	4.26	1.39	4.49	1.22	4.70	1.18	4.96	1.12	**	**	

下位尺度　挑：挑戦志向　貢：貢献志向　人；対人志向　上：上位志向　評：評価志向；有意水準　**：$p<.001$　*：$p<.01$

Table 2-5　就業動機の下位尺度の平均評定値

	日本 M	日本 SD	日本 α	韓国 M	韓国 SD	韓国 α	男性 M	男性 SD	女性 M	女性 SD	主効果 国	主効果 性	交互作用
挑戦志向	12.51	2.51	.62	13.96	2.18	.57	13.13	2.54	13.15	2.43	**		
貢献志向	13.86	3.25	.90	14.56	2.88	.88	14.09	3.30	14.22	2.96	**		
対人志向	13.83	2.79	.67	13.93	2.85	.81	13.58	2.93	14.10	2.71		†	
上位志向	12.78	2.99	.77	13.78	2.96	.80	13.12	3.08	13.29	2.96	**		
評価志向	12.88	2.90	.68	13.99	2.78	.76	13.11	2.93	13.56	2.86	**		

有意水準　**：$p<.001$　†：$p<.05$

職に就きたい」という達成や成功に関連した項目の評定値が低かった。韓国でも日本と同様に「対人志向」や「貢献志向」の項目の評定値が高いが，さらに「挑戦志向」に含まれる「努力や能力を必要とする仕事がしたい」と「仕事で成功するためには決して努

	仕事を通じて色々な人に出会いたい	社会的に有意義な仕事がしたい	職場では周りの人々との調和が何よりも大切だ	世の中の役に立つような仕事がしたい	社会に貢献できるような職業に就きたい	努力や能力を必要とする仕事がしたい	給料のよい職業に就くことは充実した生活に欠かせない	昇格や昇進の機会がある仕事を得ることは重要だ	家族に喜んでもらえるような職業に就きたい	仕事で成功するためには決して努力を惜しまない	常に多くの人との出会いがある仕事がしたい	みんなに期待されるような仕事がしたい	周りから賞賛されるような仕事をしたい	職場では高い役職に就きたい	困難な仕事でも人に助けを借りずに自分の力でやり遂げたい
日本	4.81	4.68	4.68	4.60	4.59	4.50	4.45	4.44	4.37	4.35	4.34	4.28	4.23	3.89	3.67
韓国	4.87	4.89	4.88	4.90	4.75	4.92	4.58	4.62	4.87	4.80	4.18	4.38	4.74	4.58	4.24

Figure 2-1　就業動機の各項目の平均評定値

Table 2-6　就業動機の下位尺度間相関

	挑戦志向	貢献志向	対人志向	上位志向	評価志向
挑戦志向		.50	.36	.28	.47
貢献志向	.50		.57	.25	.54
対人志向	.33	.53		.31	.44
上位志向	.32	.25	.39		.51
評価志向	.39	.50	.54	.58	

右上が日本，左下が韓国

力を惜しまない」，「評価志向」に含まれる「家族に喜んでもらえるような職業に就きたい」と「周りから賞賛されるような仕事をしたい」の評定値も高かった（Figure 2-1）。

5つの下位尺度得点について分散分析を行ったところ，「対人志向」を除くすべてに国の主効果が0.1%水準で有意であり（Fs>15.26, p<.001），いずれも韓国が高い動機を保持していた（Table 2-5）。

下位尺度間の相関はいずれも高く，相関行列のパターンも日韓で類似していた。特に「挑戦志向」と「貢献志向」，「貢献志向」と「対人志向」，「上位志向」と「評価志向」の相関が高かった（Table 2-6）。

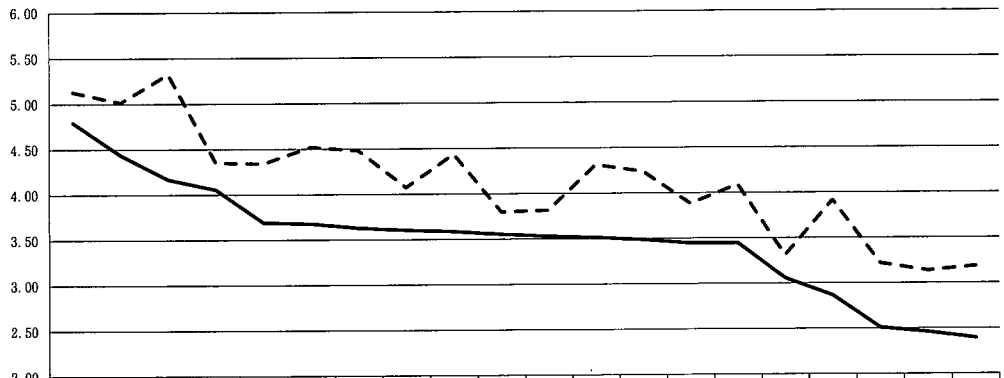
達成目標志向性

20項目のうち「先生に『間抜けな』質問をして，頭が悪いと思われないか心配だった」を除くすべての項目で，国の主効果が0.1%水準ないし1%水準で有意であり，

Table 2-7　達成目標志向性の各項目の平均評定値

		下位尺度	日本 男性 M	日本 男性 SD	日本 女性 M	日本 女性 SD	韓国 男性 M	韓国 男性 SD	韓国 女性 M	韓国 女性 SD	主効果 国	主効果 性	交互作用
1	授業で他の人よりも成績が良いならば，よくやったという気持ちになった	接	4.62	1.22	4.99	0.98	5.03	0.93	0.89	0.94	**	**	
2	授業で，私は他の人よりもよい点数をとろうと思っていた	接	4.43	1.43	4.44	1.36	5.07	0.96	4.99	1.04	**		
3	授業で成績が悪いことへの不安が，私を勉強に駆り立てていた	避	3.34	1.56	3.69	1.44	4.22	1.34	4.35	1.32	**	*	
4	授業を終える時，より広く深い知識を得ていたいと思っていた	マ	3.47	1.35	3.49	1.23	4.26	1.26	4.22	1.24	**		
5	先生に喜んでもらえるようによい成績をとろうと思っていた	承	2.31	1.35	2.73	1.54	3.14	1.55	3.24	1.47	**	**	
6	よい成績をとって友人にかしこいと思われたかった	承	3.46	1.57	3.43	1.54	3.94	1.42	3.86	1.45	**		
7	他の人より良い成績をとろうと思うとやる気が出た	接	4.00	1.54	4.12	1.40	4.42	1.21	4.29	1.33	**		
8	友人から一目置かれるようによい成績をとろうと思っていた	承	3.64	1.54	3.48	1.56	3.91	1.46	3.74	1.48	*		
9	とにかく授業で悪い成績をとりたくなかった	避	4.03	1.44	4.31	1.42	5.27	1.00	5.35	0.87	**	*	
10	授業では，難解なものであったとしても，私の好奇心が刺激される教材を好んでいた	マ	3.61	1.47	3.45	1.34	4.15	1.37	3.65	1.31	**	**	
11	授業で悪い成績をとってしまうのではないかと心配していた	避	3.39	1.61	3.90	1.40	4.36	1.20	4.54	1.26	**	**	
12	授業から出来るだけ多くのことを知りたいと思っていた	マ	3.63	1.34	3.75	1.28	4.46	1.24	4.29	1.25	**		
13	授業で成績が悪かったらどうしようとよく考えていた	避	3.23	1.61	3.68	1.48	4.09	1.37	4.09	1.46	**	*	
14	授業の内容を，出来るだけ徹底的に理解することが重要だった	マ	3.62	1.35	3.73	1.31	4.72	1.02	4.44	1.24	**		
15	先生にほめてもらうためによい成績をとりたかった	承	2.20	1.29	2.60	1.45	3.09	1.48	3.24	1.48	**	**	
16	先生に「間抜けな」質問をして，頭が悪いと思われないか心配だった	避	3.01	1.56	3.10	1.55	2.93	1.44	3.47	1.48		*	
17	授業で紹介された教材を完璧にマスターしたかった	マ	2.84	1.38	2.90	1.32	3.97	1.28	3.89	1.35	**		
18	他の人と比べて良い成績をとることが重要だった	接	3.56	1.55	3.63	1.50	4.47	1.24	4.43	1.31	**		
19	自分の能力を友人や指導者や家族などに示すために，授業で良い点数をとりたかった	接	3.51	1.53	3.70	1.47	3.95	1.46	4.12	1.37	**		
20	先生に認めてほしいので一生懸命勉強していた	承	2.33	1.35	2.61	1.43	2.98	1.38	3.22	1.50	**	*	

下位尺度　マ：マスタリー目標　接：遂行接近目標　避：遂行回避目標　承：社会的承認目標；有意水準　**：$p<.001$　*：$p<.01$



	授業で他の人よりも成績が良いならば，よくやったという気持ちになった	授業で，私は他の人よりもよい点数をとろうと思っていた	とにかく授業で悪い成績をとりたくなかった	他の人より良い成績をとろうと思うとやる気が出た	授業から出来るだけ多くのことを知りたいと思っていた	授業の内容を，出来るだけ徹底的に理解することが重要だった	授業で悪い成績をとってしまうのではないかと心配していた	自分の能力を友人や指導者や家族などに示すために，授業で良い点数をとりたかった	他の人と比べて良い成績をとることが重要だった	友人から一目置かれるようによい成績をとろうと思っていた	授業では，難解なものであったとしても，私の好奇心が刺激される教材を好んでいた	授業で成績が悪いことへの不安が，私を勉強に駆り立てていた	授業を終える時，より広く知識を得ていたと思っていた	よい成績をとって友人にいわれたかしと思った	授業で成績が悪かったらどうしようと考えていた	先生に「間抜け」質問をして，頭が悪いと思われないか心配だった	授業で紹介された教材を完璧にマスターしたかった	先生に喜んでもらえるようによい成績をとろうと思っていた	先生に認めてほしいので一生懸命勉強していた	先生にほめてもらうためによい成績をとりたかった
―― 日本	4.80	4.43	4.17	4.06	3.69	3.67	3.63	3.60	3.60	3.56	3.54	3.51	3.48	3.45	3.44	3.05	2.87	2.51	2.47	2.39
- - 韓国	5.13	5.02	5.32	4.33	4.34	4.52	4.48	4.06	4.44	3.80	3.81	4.31	4.23	3.89	4.09	3.30	3.92	3.21	3.14	3.19

Figure 2-2　達成目標志向性の各項目の平均評定値

韓国の方が評定値が高かった。また教員からの承認を求める項目（項目 5，15）や，「授業で他の人よりも成績が良いならば，よくやったという気持ちになった」，「授業で悪い成績をとってしまうのではないかと心配していた」といった項目で性別の主効果が 0.1% 水準で有意であり，女性の評定値が高かった。また「授業では，難解なものであったとしても，私の好奇心が刺激される教材を好んでいた」も有意であり，こちらは男性の得点が高かった（Table 2-7）。

項目間の差異では，日本でも韓国でも「授業で他の人よりも成績が良いならば，よくやったという気持ちになった」など「遂行接近目標」に含まれる項目や「とにかく授業で悪い成績をとりたくなかった」の評定値が高く，「先生にほめてもらうためによい成績をとりたかった」など教師に対する「社会的承認目標」の 3 項目の評定値が低かった

Table 2-8　達成目標志向性の下位尺度の平均評定値

	日本			韓国			男性		女性		主効果		交互作用
	M	*SD*	α	*M*	*SD*	α	*M*	*SD*	*M*	*SD*	国	性	
マスタリー目標	17.24	5.03	.81	20.83	4.73	.80	18.58	5.29	18.99	5.15	**		
遂行接近目標	20.50	5.81	.88	22.98	4.67	.85	21.05	5.77	21.99	5.21	**		
遂行回避目標	17.82	5.56	.78	21.53	4.60	.77	18.27	5.56	20.31	5.26	**	**	
承認目標	14.36	5.90	.86	17.27	6.11	.89	14.94	5.83	16.14	6.35	**		

有意水準　**：$p<.001$

Table 2-9　達成目標志向性の下位尺度間相関

	マスタリー目標	遂行接近目標	遂行回避目標	社会的承認目標
マスタリー目標		.34	.34	.35
遂行接近目標	.36		.49	.66
遂行回避目標	.34	.63		.51
社会的承認目標	.32	.62	.44	

右上が日本，左下が韓国

(Figure 2-2)。

4つの下位尺度ではすべてにおいて国の主効果が0.1%水準で有意であり（Fs>60.52, p<.001），いずれも韓国が高かった。また「遂行回避目標」で性別の主効果が有意で（$F(1, 1263)=20.62$, p<.001），女性が高かった（Table 2-8）。

各目標間の相関は全体として高い正の相関が認められ，相関行列のパターンも日韓で類似していた。特に「遂行接近目標」,「遂行回避目標」,「社会的承認目標」間の相関が高かった。また日本では「遂行接近目標」と「社会的承認目標」の相関がやや高く，韓国では「遂行接近目標」と「遂行回避目標」の相関がやや高かった（Table 2-9）。

期待の大きさ

自分の親や家族，友人やクラスメイト，教師の三者から感じる自分に対する期待の大きさの認知について分散分析を行った。すべての期待の程度について国の主効果が有意であり，韓国が日本より期待されているという認知を高く保持していた（Fs>112.13, p<.001）。また友人やクラスメイト，および教師からの期待については性別の主効果も有意であり，男性が女性よりも期待されているという認知を高く保持していた（Fs>9.17, p<.01）。さらに教師の期待については交互作用も有意であり（$F=7.10$, p<.01），日本では男性（$M=3.03$）と女性（$M=2.98$）に差異はなかったが，韓国では男性（$M=4.23$）が女性（$M=3.78$）より教師からの期待を高く認知していた（Table 2-10）。

Table 2-10　期待の大きさの各項目の平均評定値

	日本				韓国						
	男性		女性		男性		女性		主効果		交互作用
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	国	性	
1 自分の親や家族から期待されていると感じる	4.02	1.37	4.04	1.18	5.15	0.76	5.08	0.91	**		
2 友人やクラスメイトから期待されていると感じる	3.34	1.30	3.24	1.13	4.21	1.18	3.87	1.15	**	*	
3 先生から期待されていると感じる	3.03	1.32	2.98	1.16	4.23	1.20	3.78	1.26	**	*	*

有意水準　**：p<.001　*：p<.01

項目間には高い正の相関が認められ，「友人やクラスメイト」と「教師」では日本で .67，韓国で .70，「親や家族」と「友人やクラスメイト」では日本で .49，韓国で .42，「親や家族」と「教師」では日本で .43，韓国で .37 であった。

親からの期待認知

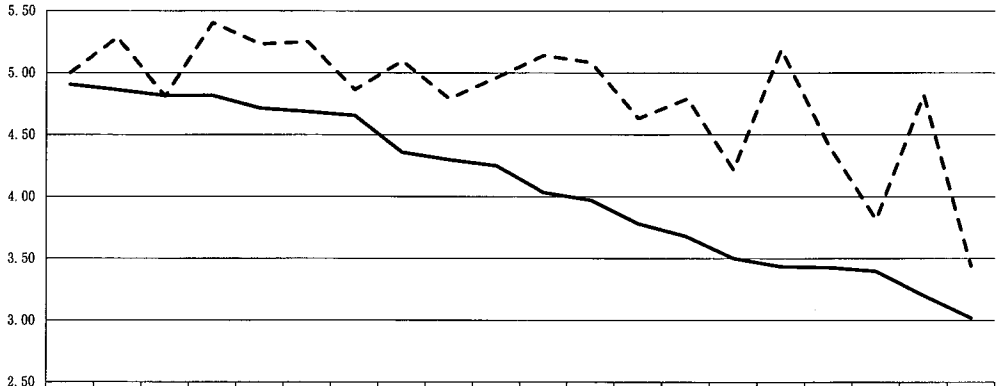
各項目の評定値について，20 項目のうち 17 項目で 0.1% 水準で国の主効果が認められた。この結果はいずれも韓国の方が日本よりもそれぞれの親の期待内容を高く認知しているというものであった。また同居（項目 5）や自慢（項目 13）については女性が高く認知していた。交互作用はほとんど認められなかった（Table 2-11）。

日本で親が自分に対して期待していると高く認知されているのは，他人の気持ちがわ

Table 2-11　親からの期待認知の各項目の平均評定値

		下位尺度	日本 男性 M	日本 男性 SD	日本 女性 M	日本 女性 SD	韓国 男性 M	韓国 男性 SD	韓国 女性 M	韓国 女性 SD	主効果 国	主効果 性	交互作用
1	子ども（私）のやりたいことを仕事としてやっていってほしい	自	4.72	1.17	4.93	1.12	4.75	1.15	4.84	1.20			
2	他人を差別したり悪口を言ったりするような人にはなってほしくない	受	4.83	1.08	4.90	1.16	5.29	0.89	5.28	0.91	**		
3	夢をもって，その夢に向かってがんばってほしい	自	4.72	1.17	4.92	1.05	5.29	0.90	5.45	0.85	**	*	
4	偏差値の低い大学には行ってほしくなかった	成	4.00	1.53	4.08	1.53	5.06	1.09	5.17	0.99	**		
5	親と同居か実家の近くに住んでほしい	孝	2.99	1.48	3.90	1.58	3.96	1.36	4.61	1.32	**	**	
6	親や家族に恥をかかせるようなことはしてほしくない	評	4.18	1.33	4.43	1.27	4.72	1.05	4.82	1.04	**	*	
7	よその子どもと比較して自分の子どものほうが優れていてほしい	評	3.60	1.41	3.76	1.44	4.78	1.16	4.81	1.13	**		
8	社会的に名前の知られている企業に就職してほしい	成	3.46	1.45	3.54	1.48	4.14	1.38	4.25	1.35	**		
9	公務員などの安定した職業についてほしい	成	3.70	1.51	3.85	1.44	4.40	1.50	4.73	1.35	**	*	
10	他人の気持ちがわかるような人になってほしい	受	4.79	1.06	5.03	0.99	5.02	0.92	4.99	0.98			
11	親孝行をしてほしい	孝	4.08	1.23	4.42	1.07	5.01	0.88	4.95	0.99	**	*	*
12	名の知れた大学へ行ってほしかった	成	3.94	1.48	4.00	1.55	5.09	1.04	5.08	0.97	**		
13	周りの人に子ども（私）のことを自慢したい	評	3.27	1.42	3.60	1.43	5.07	0.96	5.26	0.93	**	**	
14	就職したら仕送りをして家計を助けてほしい	孝	3.01	1.38	3.03	1.30	3.44	1.42	3.45	1.47	**		
15	自分のことは自分で考えて決めてほしい	自	4.66	1.07	4.63	1.12	4.75	1.09	4.92	1.04	*		
16	近所の人に子ども（私）のことを褒められたい	評	3.11	1.36	3.29	1.41	4.72	1.21	4.87	1.06	**		
17	誰にでも好かれる人になってほしい	受	4.24	1.27	4.48	1.21	5.09	0.94	5.10	1.01	**		
18	社会のなかで受け入れられる人になってほしい	受	4.65	1.04	4.78	0.99	5.21	0.80	5.25	0.87	**		
19	自分に正直に生きてほしい	自	4.57	1.11	4.81	1.06	5.27	0.87	5.24	0.93	**		
20	社会に出たら家族の世話をしてほしい	孝	3.41	1.30	3.38	1.31	3.94	1.27	3.76	1.33	**		

下位尺度　自：自己実現　受：社会的受容　成：社会的成功　孝：親孝行　評：反英的評価；有意水準　**：$p<.001$　*：$p<.01$



	他人の気持ちがわかるような人になってほしい	他人を差別したり悪口をいったりするような人にはなってほしくない	子ども(私)のやりたいことを仕事としてやっていってほしい	夢をもって，その夢に向かってがんばってほしい	社会のなかで受け入れられる人になってほしい	自分に正直に生きてほしい	自分のことは自分で考えて決めてほしい	誰にでも好かれる人になってほしい	親や家族に恥をかかせるようなことはしてほしくない	親孝行をしてほしい	偏差値の低い大学には行ってほしくなかった	名の知れた大学へ行ってほしかった	公務員などの安定した職業についてほしい	よその子どもと比較して自分の子どものほうが優れていてほしい	社会的に名前の知られている企業に就職してほしい	周りの人に子ども(私)のことを自慢したい	親と同居か実家の近くに住んでほしい	社会に出たら家族の世話をしてほしい	近所の人に子ども(私)のことを褒められたい	就職したら仕送りをして家計を助けてほしい
━━ 日本	4.90	4.86	4.82	4.82	4.71	4.69	4.65	4.36	4.30	4.24	4.04	3.97	3.77	3.67	3.50	3.43	3.43	3.39	3.20	3.02
┅ 韓国	5.00	5.28	4.81	5.40	5.24	5.25	4.86	5.10	4.79	4.97	5.14	5.08	4.63	4.80	4.21	5.20	4.41	3.81	4.82	3.45

Figure 2-3　親からの期待認知の平均評定値

かること，他人を差別したり悪口を言わないことなど「社会的受容」に関する内容や，やりたいことを仕事にすること，夢をもつことなど「自己実現」に関する内容である。家計への援助や同居など「親孝行」や自慢など「反映的評価」の項目の評定値は低い。韓国では「自己実現」や「社会的受容」の項目と共に，「偏差値の低い大学に行ってほしくなかった」，「名の知れた大学に行ってほしかった」といった「社会的成功」に関する項目や「周りの人に子ども（私）のことを自慢したい」，「近所の人に子ども（私）のことを褒められたい」といった「反映的評価」に関する項目についても高く評定されている（Figure 2-3）。

５つの下位尺度得点について，国の主効果がすべて 0.1% 水準で有意であり（Fs> 44.53, p<.001），特に「社会的成功」と「反映的評価」の日韓の平均値差が大きかった。

Table 2-12　親からの期待認知の下位尺度の平均評定値

	日本			韓国			男性		女性		主効果		交互作用
	M	*SD*	α	*M*	*SD*	α	*M*	*SD*	*M*	*SD*	国	性	
自己実現	18.97	3.41	.77	20.33	2.96	.72	19.11	3.32	19.90	3.23	**	*	
社会的受容	18.85	3.36	.76	20.61	3.03	.84	19.19	3.35	19.94	3.29	**		
社会的成功	15.28	4.84	.82	19.05	3.48	.71	16.24	4.73	17.44	4.59	**		
親孝行	14.07	3.82	.67	16.63	3.45	.60	14.39	3.96	15.79	3.69	**	**	
反映的評価	14.61	4.37	.79	19.61	3.09	.71	15.83	4.63	17.54	4.42	**	*	

有意水準　**：p<.001　*：p<.01

Table 2-13　親からの期待認知の下位尺度間相関

	自己実現	社会的受容	社会的成功	親孝行	反映的評価
自己実現		.60	−.16	.09	−.05
社会的受容	.67		.11	.24	.23
社会的成功	−.05	.10		.35	.66
親孝行	.02	.10	.30		.43
反映的評価	.10	.26	.58	.31	

右上が日本，左下が韓国

また「親孝行」で性別の主効果が 0.1% 水準で有意であり（$F(1, 1257)=18.84$, $p<.001$），女性が「親孝行」の期待を高く認知していた（Table 2-12）。

下位尺度間の相関では，「自己実現」と「社会的受容」，「社会的成功」と「反映的評価」，「親孝行」と「反映的評価」の間に高い正の相関が認められた。日本では，「社会的成功」，「親孝行」，「反映的評価」の間の相関が韓国よりも比較的高く，「親孝行」と「社会的受容」の間の相関も韓国と比較して高かった（Table 2-13）。

教師からの期待認知

18 項目中 10 項目で 0.1% 水準で国の主効果が認められた。「みんなと楽しんでほしい」，「善悪の判断ができる人になってほしい」など，そのうち 6 項目では日本が韓国と比べて教師からの期待を高く認知していた。「成績」に関連する「偏差値を上げてほしい」，「有名な大学に行ってほしい」と「規範獲得」に関連する「校則をきちんと守ってほしい」，「ルールを守ってほしい」では，韓国が日本と比べて教師の期待を高く認知していた。また 7 項目で 0.1% 水準で性別の主効果が認められ，「規範獲得」，「成績」，「自己実現」に関連する項目で女性が教師からの期待を高く認知していた（Table 2-14）。

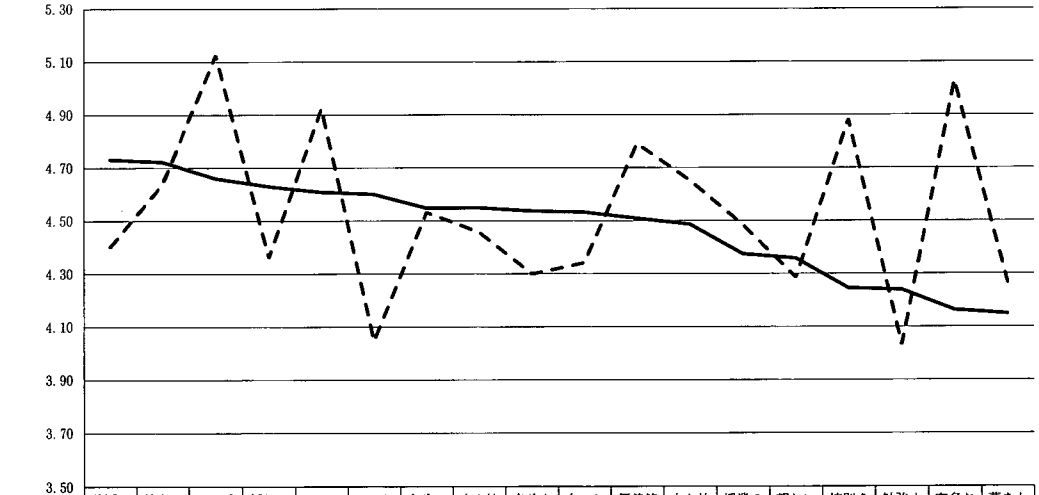
項目別では，日本では「善悪の判断ができる人になってほしい」，「社会に役に立つ人になってほしい」の評定値が高いが，平均評定値の項目間の分散は韓国ほど大きくない。一方，韓国で「よい成績をとってほしい」など「成績」に関する項目と「規範獲得」に関連する「校則をきちんと守ってほしい」，「ルールを守ってほしい」において教師の期待を非常に高く認知し，「みんなと楽しんでほしい」，「勉強することの楽しさを知ってほしい」において低く認知していた（Figure 2-4）。

6 つの下位尺度得点では，「成績」において国の主効果が 0.1% 水準で有意であり（$F(1, 1268)=72.76$, $p<.001$），韓国が日本より高く評定していた。また「交友関係」を除く 5 つの下位尺度で性別の主効果が 0.1% 水準で有意であり（Fs>11.99, $p<.001$），

Table 2-14　教師からの期待認知の各項目の平均評定値

	下位尺度	日本 男性 M	日本 男性 SD	日本 女性 M	日本 女性 SD	韓国 男性 M	韓国 男性 SD	韓国 女性 M	韓国 女性 SD	主効果 国	主効果 性	交互作用
1 みんなと楽しんでほしい	交	4.46	1.26	4.76	1.09	4.02	1.39	4.06	1.30	**	*	
2 偏差値を上げてほしい	成	4.39	1.25	4.64	1.18	4.59	1.13	4.88	1.01	**	**	
3 人と協力してほしい	社	4.38	1.20	4.72	1.07	4.48	1.06	4.44	1.10		*	*
4 新しいことを吸収してほしい	マ	4.49	1.10	4.77	1.08	4.35	1.26	4.37	1.11	**	*	
5 勉強することの楽しさを知ってほしい	マ	4.08	1.32	4.41	1.22	3.99	1.40	4.05	1.29	**	*	
6 親しい友達をつくってほしい	交	4.23	1.26	4.50	1.15	4.39	1.24	4.24	1.24			*
7 よい成績をとってほしい	成	4.52	1.18	4.82	1.00	4.99	1.01	5.18	0.92			
8 社会に役に立つ人になってほしい	社	4.57	1.20	4.89	1.06	4.66	1.10	4.64	1.14		*	
9 善悪の判断ができる人になってほしい	規	4.59	1.24	4.88	1.09	4.41	1.22	4.40	1.25	**		
10 人のために何かできる人になってほしい	社	4.36	1.27	4.73	1.14	4.37	1.22	4.33	1.18	**	*	*
11 自分の得意なことを見つけてほしい	実	4.40	1.27	4.71	1.15	4.43	1.29	4.58	1.25		**	
12 校則をきちんと守ってほしい	規	4.01	1.55	4.51	1.38	4.68	1.21	4.98	1.03	**	**	
13 授業の内容に興味をもってほしい	マ	4.20	1.22	4.57	1.09	4.45	1.17	4.50	1.10		**	
14 夢をもち続けてほしい	実	3.96	1.36	4.36	1.27	4.23	1.22	4.29	1.31		**	
15 人と仲良くなってほしい	交	4.38	1.16	4.60	1.08	4.65	1.01	4.65	1.04			
16 有名な大学に行ってほしい	成	4.02	1.46	4.31	1.40	4.89	1.18	5.09	1.10	**	**	
17 自分を大切にしてほしい	実	4.38	1.23	4.71	1.17	4.40	1.19	4.25	1.27	**		*
18 ルールを守ってほしい	規	4.46	1.32	4.78	1.12	4.73	1.02	5.01	0.98	**	**	

下位尺度　交：交友関係　成：成績　社：社会性　マ：マスタリー　規：規範獲得　実：自己実現；有意水準　**：$p<.001$　*：$p<.01$



	善悪の判断ができる人になってほしい	社会に役に立つ人になってほしい	よい成績をとってほしい	新しいことを吸収してほしい	ルールを守ってほしい	みんなと楽しんでほしい	自分の得意なことを見つけてほしい	人と協力してほしい	自分を大切にしてほしい	人のために何かできる人になってほしい	偏差値を上げてほしい	人と仲良くなってほしい	授業の内容に興味をもってほしい	親しい友達をつくってほしい	校則をきちんと守ってほしい	勉強することの楽しさを知ってほしい	有名な大学に行ってほしい	夢をもち続けてほしい
日本	4.73	4.72	4.66	4.63	4.61	4.60	4.55	4.55	4.54	4.53	4.51	4.48	4.37	4.36	4.25	4.24	4.16	4.15
韓国	4.41	4.65	5.12	4.36	4.92	4.04	4.53	4.45	4.30	4.34	4.79	4.65	4.48	4.29	4.88	4.03	5.03	4.27

Figure 2-4　教師からの期待認知の各項目の平均評定値

Table 2-15　教師からの期待認知の下位尺度の平均評定値

	日本			韓国			男性		女性		主効果		交互作用
	M	*SD*	α	*M*	*SD*	α	*M*	*SD*	*M*	*SD*	国	性	
交友関係	13.46	3.04	.83	12.99	3.02	.78	13.08	3.13	13.38	2.96	*		
成　績	13.33	3.24	.82	14.94	2.57	.75	13.43	3.21	14.49	2.87	**	**	
社会性	13.80	2.99	.81	13.45	2.85	.78	13.37	3.06	13.86	2.82	*	**	**
マスタリー	13.24	2.93	.76	12.87	2.94	.74	12.77	3.00	13.31	2.86	*	**	
規範獲得	13.59	3.06	.68	14.21	2.41	.56	13.31	3.01	14.28	2.57	*	**	
自己実現	13.24	3.25	.82	13.09	3.24	.82	12.84	3.20	13.43	3.25		**	*

有意水準　**：$p<.001$　*：$p<.01$

Table 2-16　教師からの期待認知の下位尺度間相関

	交友関係	成　績	社会性	マスタリー	規範獲得	自己実現
交友関係		.18	.68	.56	.44	.69
成　績	.04		.27	.28	.33	.14
社会性	.74	.13		.59	.54	.71
マスタリー	.63	.16	.65		.43	.68
規範獲得	.31	.39	.51	.39		.45
自己実現	.74	.07	.71	.66	.36	

右上が日本，左下が韓国

女性が教師からの期待を高く認知していた（Table 2-15）。

下位尺度間の相関では，「成績」を除く5つの期待の間には高い正の相関が認められた。なかでも「交友関係」と「社会性」，「自己実現」と「社会性」，「自己実現」と「マスタリー」，「自己実現」と「交友関係」の間には特に高い正の相関が認められた。この関係は日韓で共通していた（Table 2-16）。

親の養育態度および教師の態度

父親と母親の養育態度の項目について2×2の分散分析を行った。「自律性」の項目では，父親，母親共に「私のすることはすべてコントロールしようとした（逆転項目）」，「私のプライバシーをおかした（逆転項目）」では0.1%ないし1%水準で日本の評定値が高く，「私が自分自身で決定を下すのを好んだ」，「望むだけ外出させてくれた」では0.1%ないし1%水準で韓国の評定値が高かった。また父親，母親共に「よく私に微笑みかけた」では0.1%水準で韓国の評定値が高かった。

また父親の「受容性」の4項目すべてで性別の主効果が0.1%水準で有意であり，女性の評定値が高かった。さらに母親の「よく私に微笑みかけた」でも性別の主効果が

Table 2-17　親の養育態度の各項目の平均評定値

			下位尺度	日本 男性 M	日本 男性 SD	日本 女性 M	日本 女性 SD	韓国 男性 M	韓国 男性 SD	韓国 女性 M	韓国 女性 SD	主効果 国	主効果 性	交互作用
父親	1	情緒的には私に冷たいように思えた（R）	受	4.43	1.23	4.74	1.34	4.27	1.52	4.59	1.42		**	
	2	私に優しく，慈愛があった	受	4.13	1.24	4.52	1.26	4.39	1.23	4.61	1.32		**	
	3	私が自分自身で決定を下すのを好んだ	律	4.27	1.29	4.47	1.24	4.56	1.34	4.63	1.25	*		
	4	私のすることはすべてコントロールしようとした（R）	律	4.71	1.31	4.77	1.35	4.35	1.35	4.25	1.37	**		
	5	私のプライバシーをおかした（R）	律	4.73	1.34	4.86	1.32	4.38	1.33	4.51	1.29	**		
	6	よく私に微笑みかけた	受	3.53	1.38	4.06	1.42	4.09	1.41	4.52	1.33	**	**	
	7	望むだけ外出させてくれた	律	4.28	1.41	4.24	1.45	4.46	1.42	4.69	1.40	**		
	8	私を誉めることはなかった（R）	受	4.37	1.39	4.74	1.32	4.69	1.42	4.86	1.39		**	
母親	1	情緒的には私に冷たいように思えた（R）	受	5.06	1.04	5.18	1.15	5.28	1.08	5.10	1.26			
	2	私に優しく，慈愛があった	受	4.78	0.99	5.05	1.09	5.14	0.98	5.06	1.07			*
	3	私が自分自身で決定を下すのを好んだ	律	4.31	1.30	4.49	1.26	4.60	1.28	4.83	1.16	**	*	
	4	私のすることはすべてコントロールしようとした（R）	律	4.13	1.43	4.24	1.45	3.98	1.41	3.83	1.44	**		
	5	私のプライバシーをおかした（R）	律	4.26	1.41	4.40	1.42	4.01	1.39	4.16	1.45	*		
	6	よく私に微笑みかけた	受	4.34	1.14	4.85	1.14	4.93	1.13	4.96	1.17	**	**	**
	7	望むだけ外出させてくれた	律	4.21	1.41	4.12	1.49	4.44	1.48	4.63	1.38	**		
	8	私を誉めることはなかった（R）	受	4.70	1.30	5.05	1.16	5.13	1.18	5.11	1.26	*	*	

下位尺度　受：受容性　律：自律性；逆転項目（R）については逆転済みの平均値を記載した；有意水準　**：$p<.001$　*：$p<.01$

0.1% 水準で有意であり，さらに交互作用も有意であった（$F(1, 1261)=12.51$, $p<.001$）。これは日本の男性（$M=4.34$）が日本の女性（$M=4.85$），韓国の男女（$M=4, 93, 4.96$）よりも低いことによる（Table 2-17）。

2つの下位尺度では，父親の「受容性」において 0.1% 水準で性別の主効果が有意であり，女性が得点が高かった（$F(1, 1245)=29.32$, $p<.001$）。また母親の「受容性」において 0.1% 水準で交互作用が有意であり（$F(1, 1256)=11.44$, $p<.001$），日本の男性（$M=18.88$）が日本の女性（$M=20.14$），韓国の男女（$M=20.44, 20.22$）よりも低か

Table 2-18　親の養育態度と教師の態度の平均評定値

		日本 M	日本 SD	日本 α	韓国 M	韓国 SD	韓国 α	男性 M	男性 SD	女性 M	女性 SD	主効果 国	主効果 性	交互作用
父親	受容性	17.23	4.41	.84	18.22	4.60	.85	16.78	4.36	18.33	4.52	*	**	
	自律性	18.18	3.90	.71	17.97	3.99	.74	17.91	4.09	18.22	3.83			
母親	受容性	19.49	3.65	.82	20.29	3.83	.84	19.38	3.57	20.18	3.85	*	*	**
	自律性	17.06	4.23	.75	17.33	4.22	.77	16.94	4.21	17.36	4.22			
教師	受容性	16.99	4.55	.89	16.32	4.54	.87	16.51	4.54	16.84	4.57	*		
	自律性	13.34	4.78	.81	11.56	3.57	.69	12.90	4.60	12.31	4.20	**		

有意水準　**：$p<.001$　*：$p<.01$

Table 2-19　教師の態度の各項目の平均評定値

		下位尺度	日本 男性 M	日本 男性 SD	日本 女性 M	日本 女性 SD	韓国 男性 M	韓国 男性 SD	韓国 女性 M	韓国 女性 SD	主効果 国	主効果 性	交互作用
1	規則やルールに厳格だった	律	3.67	1.55	3.96	1.51	4.14	1.23	4.32	1.19	**	*	
2	悩んでいるときに相談に乗ってくれた	受	4.05	1.39	4.28	1.32	3.93	1.37	3.85	1.45	**		
3	わからないところがあるとわかるまで教えてくれた	受	4.28	1.33	4.56	1.22	4.11	1.33	4.20	1.31	**	*	
4	普段の生活態度に干渉して細かく言っていた	律	3.29	1.58	3.49	1.55	3.70	1.36	3.46	1.29			
5	私をほめてくれたり，励ましたりしてくれた	受	4.16	1.33	4.48	1.26	4.38	1.20	4.36	1.26			
6	生徒が間違ったことをしたり，悪いことをすると厳しく叱った	律	4.14	1.41	4.17	1.37	4.51	1.19	4.37	1.24	**		
7	私の話をよく聞いてくれた	受	4.03	1.27	4.16	1.29	4.05	1.29	3.86	1.36			
8	生徒の行動をコントロールしようとしていた	律	3.31	1.47	3.33	1.46	4.24	1.25	4.22	1.21	**		

下位尺度　受：受容性　律：自律性；自律性の項目はすべて逆転項目だが，平均値は逆転前の評定値による；有意水準　**：$p<.001$　*：$p<.01$

った（Table 2-18）。

教師の態度の項目では，「自律性（逆転項目）」の3項目で国の主効果が0.1%水準で有意であり，韓国の方が得点が高く（Fs>12.18, $p<.001$），日本より自律性が認められていないと認知する結果であった。また「悩んでいるときに相談に乗ってくれた」，「わからないところがあるとわかるまで教えてくれた」でも国の主効果が0.1%水準で有意であり，日本の得点が高かった（Fs>14.24, $p<.001$）（Table 2-19）。下位尺度得点でも「自律性」で国の主効果が認められ（$F(1, 1264)=48.94$, $p<.001$），日本の方が得点が高く自律性を認めていると認知していた（Table 2-18）。

父親と母親それぞれの「受容性」と「自律性」の間の相関，および「受容性」，「自律性」それぞれの父母間の相関が高かった。教師の態度は親の養育態度とは相関が認められず，韓国では教師の「受容性」と「自律性」の間に負の相関が認められたが，日本ではそれほど大きくなかった（Table 2-20）。

Table 2-20　親の養育態度と教師の態度の相関

		父親 受容性	父親 自律性	母親 受容性	母親 自律性	教師 受容性	教師 自律性
父親	受容性		.44	.44	.23	.20	−.04
	自律性	.54		.36	.45	.13	.10
母親	受容性	.43	.30		.45	.31	−.05
	自律性	.26	.49	.52		.20	.10
教師	受容性	.21	.15	.24	.18		−.14
	自律性	−.05	.02	−.13	−.04	−.32	

右上が日本，左下が韓国

考　察

●韓国では高い達成に対する周囲からの期待とプレッシャーが高いか？

親や家族，友人，教師いずれの期待も韓国の大学生の方が日本の大学生より高く認知していた。またそれに対応する形で，親から期待されている個々の内容についても，韓国の大学生の方が日本の大学生よりも高く認知しているが，特に偏差値の高い大学，公務員や名前の知られている企業への就職など社会的な成功を期待されているという認知や，親が自分の子どもを自慢したい，褒められたいと考えているという認知で，日韓で大きな差異が認められた。高校の教師からの期待においても，韓国の大学生の方が成績や偏差値に対する要求を日本よりも高く認知していた。この結果は，韓国が日本に比べて高い達成が期待されているという予測と合致する結果である。高校時代の達成目標志向性も韓国の大学生の方が，遂行接近目標，遂行回避目標，社会的承認目標のいずれも高く認知している。

自己・他者志向的動機に対する態度尺度の「他者志向的動機の否定的認知」の項目では，「他者のため」と考えて達成行動に従事することのプレッシャーや罪悪感などについて尋ねているが，その評定値に基づくとプレッシャーを否定的に認知しているのは日本の大学生であった。つまり日本の大学生の方が韓国の大学生と比較して周囲の人からの期待の認知は低いのに，周りの人のためにという意識で達成行動に従事することに対するプレッシャーなどについて否定的に認知していたことになる。この結果は研究当初の予測とは異なるものであった。

●韓国では親や教師に対する関係性が日本とは異なって認識されているか？

今回，親と教師の関係性については受容性と自律性という2つの次元で測定した。親の養育態度については，父親・母親共に韓国の大学生の方が受容性を高く認知していた。この結果からは韓国の親子関係の方が日本よりも良好であることがうかがえる。ただし自律性については日韓で平均評定値に有意な差異が認められなかったが，日本の大学生が高く評定する項目と韓国の大学生が高く評定する項目に分かれたため，この結果について慎重に解釈する必要がある。

一方，教師との関係性については日韓で差異が認められた。高校時代の教師の受容性，自律性ともに日本の大学生が韓国の大学生よりも高く認知しており，肯定的と言える。また教師から期待される内容についても，「みんなと楽しんでほしい」といった交友関

係に対する期待や人との協力や社会への貢献，授業の内容に対するマスタリー的な期待は，いずれも日本の大学生の方が高く認知しており，日本の教師ー生徒関係が韓国よりも対人的な観点からは親密性が高いと推察される。対照的に韓国の大学生は高校時代の教師について，成績を上げたり有名な大学に通うという期待やルールや校則を守るという期待を高く認知していた。親の養育態度の結果と合わせて考えると，日本と韓国の大学生では自律性の意味そのものが異っている可能性も考えられる。

●関係性に基づく動機づけ

韓国の大学生の方が日本の大学生に比べて，自己志向的動機を重視する傾向が認められた。またこれと負の相関が認められている他者志向的動機を重視する傾向では日韓の差異は認められなかったが，「他者志向的動機の重視」を測定する項目において，日本の大学生の評定値が高い項目と韓国の大学生の評定値が高い項目があることが明らかになった。これについては今後の検討が必要となる。「自己・他者志向的動機の統合」については女性の方が高いという結果が得られたものの，日韓の差異は認められなかった。

関係性に基づく就業動機の日韓比較では，「対人志向」こそ差異は認められなかったが，韓国の大学生が社会のためにつくす仕事をするという社会貢献に対する志向性や他者から評価される仕事をするという他者からの評価に対する志向性が高いことが明らかにされた。将来の職業に対して挑戦を求める志向も韓国の大学生が高いことから，韓国の大学生の方が日本の大学生と比較して将来の職業に対する動機づけが全体として高いと推察される。

第3章
自己・他者志向的動機への態度と諸変数の関連

伊藤忠弘

目　的

研究開始当初の作業モデルでは自己・他者志向的動機への態度は，親や教師からの期待の大きさやその内容を受けて形成され，学習における達成目標志向性とともに，将来に向けた動機づけの現れとしての就業動機に影響を与えると予想した。

そこで本章では，自己・他者志向的動機への態度とその前後に仮定されている諸変数との相関を調べることによって，媒介要因としての役割について探索的に検討する。また親や教師の期待と自己・他者志向的動機への態度との関連については，親や教師との関係性が調整変数となり，良好な関係の時にはその期待を満たそうとする他者志向的動機の獲得や自己・他者志向的動機の統合を促すが，良好な関係にない時にはむしろ他者志向的動機に対する否定的な認知を生じさせることが予想される。この仮説について，「受容性」得点に基づいて受容性の異なる群に分けて比較検討する。日韓の比較については，韓国の方が期待と他者志向的動機の関連が強く認められる可能性を予想しており，この点についても合わせて検討する。

結　果

●期待の大きさとの関連

他者の期待に応えようとして努力する他者志向的な達成動機づけは，他者から期待されている（あるいは期待された）という経験をその前提とすると考えられる。周囲の他者からの期待認知と各下位尺度との間に，日本ではほとんど高い相関が認められなかったが，韓国では期待されていると認知しているほど，自己志向的動機と他者志向的動機を統合して捉えている傾向が認められた。また友人や教師から期待されていると認知しているほど，他者志向的動機を肯定的に捉える傾向も認められた（Table 3-1)。

Table 3-1　自己・他者志向的動機への態度と期待の大きさの相関

	日本			韓国		
	親・家族	友人	教師	親・家族	友人	教師
自己志向	−.04	−.03	.01	.02	−.06	−.12
他者志向	.11	.19	.11	.11	.22	.20
他者否定	.07	.01	.04	.13	.08	.06
還元	.09	−.01	.00	.19	.09	.03
統合	.18	.16	.11	.27	.26	.23

●親の期待の内容との関連

日韓共に自己実現と社会的受容の期待を高く認知しているほど自己・他者志向的動機を統合して捉えている傾向が認められた。特に日本では，「社会的受容」と「統合」の相関が高かった。また日本では「他者志向的動機の重視」と「社会的受容」，「社会的成功」，「反映的評価」に正の相関が認められたが，韓国ではこのような傾向は認められなかった（Table 3-2，Table 3-3）。

他者からの期待が他者志向的動機の獲得や自己・他者志向的動機の統合に影響を及ぼすのは，その他者との関係性が支持的で信頼のおける場合に限られるかもしれない。支持的でない関係においてその他者からの期待は他者志向的動機の否定的側面を強調させたり，むしろ自己志向的動機の獲得を促すかもしれない。そこで国別に父親，母親それ

Table 3-2　親からの期待認知と自己・他者志向的動機への態度との相関（日本）

	自己実現	社会的受容	社会的成功	親孝行	反映的評価
自己志向	.07	−.05	−.04	.00	−.01
他者志向	.06	.21	.20	.17	.22
他者否定	.06	.11	.12	.09	.15
還元	.04	.10	.13	.05	.18
統合	.28	.37	.09	.12	.14

Table 3-3　親からの期待認知と自己・他者志向的動機への態度との相関（韓国）

	自己実現	社会的受容	社会的成功	親孝行	反映的評価
自己志向	.03	.04	.16	.14	.12
他者志向	.04	.10	−.10	.00	−.02
他者否定	.04	.07	.14	.09	.15
還元	.05	.05	.20	.06	.17
統合	.25	.25	.07	.02	.19

Table 3-4　父親の養育態度別の親からの期待認知と自己・他者志向的動機への態度の相関（日本）

	父親高受容群（19点以上；291名）					父親低受容群（15点以下；260名）				
	自己実現	社会的受容	社会的成功	親孝行	反映的評価	自己実現	社会的受容	社会的成功	親孝行	反映的評価
自己志向	.03	−.14	−.03	−.01	.00	.10	.00	−.06	−.01	−.08
他者志向	.06	.21	.17	.13	.12	.03	.22	.26	.15	.27
他者否定	−.02	.07	.12	.09	.13	.05	.17	.13	.08	.17
還　元	−.02	.05	.12	.02	.14	.07	.16	.18	.09	.18
統　合	.30	.34	.02	.15	.09	.21	.35	.16	.08	.15

Table 3-5　父親の養育態度別の親からの期待認知と自己・他者志向的動機への態度の相関（韓国）

	父親高受容群（21点以上；201名）					父親低受容群（17点以下；235名）				
	自己実現	社会的受容	社会的成功	親孝行	反映的評価	自己実現	社会的受容	社会的成功	親孝行	反映的評価
自己志向	.16	.01	.08	.10	.08	−.02	.09	.26	.19	.22
他者志向	−.11	.20	.09	.02	.10	.08	.03	−.31	−.10	−.22
他者否定	−.03	.11	.12	.11	.12	.12	.05	.16	.12	.15
還　元	.10	.03	.18	.04	.12	.05	.12	.21	.13	.20
統　合	.12	.24	.05	−.01	.20	.25	.21	.09	.05	.13

ぞの「受容性」得点に基づいて高・中・低の3群を構成し，高群と低群それぞれについて再度相関係数を算出し比較した。

日本では父親の受容得点が高い群で，自己実現と社会的受容を期待されていると認知しているほど「統合」がなされている傾向が認められた。父親の受容性が低い群では，これに加えて社会的成功と反映的評価が期待されていると認知しているほど他者志向的動機を重視する傾向が認められた（Table 3-4）。

韓国でも「社会的受容」と「統合」は父親の受容性のいずれの群でも正の相関があり，父親の受容性の低い群では「自己実現」と「統合」が正の相関が認められ，これらの結果は日本と共通していた。日本と対照的なのは，父親の受容性が低い群で，「社会的成功」と「反映的評価」の期待と他者志向的動機の獲得の間に負の相関が認められたことであり，日本の結果とは正反対の結果が得られた。またこの「社会的成功」と「反映的評価」の期待は「自己志向」と正の相関があり，自己志向的動機の重視を促す傾向が示唆された（Table 3-5）。

母親の場合，日韓に共通して「社会的受容」，「自己実現」と「統合」の相関，および「反映的評価」と「還元」，「統合」の相関は受容性の低い群で大きかった。日本ではこ

Table 3-6　母親の養育態度別の親からの期待認知と自己・他者志向的動機への態度の相関（日本）

	母親高受容群（22点以上；253名）					母親低受容群（18点以下；262名）				
	自己実現	社会的受容	社会的成功	親孝行	反映的評価	自己実現	社会的受容	社会的成功	親孝行	反映的評価
自己志向	.03	−.01	.01	.08	−.01	.07	−.10	−.13	−.09	−.05
他者志向	.07	.18	.12	.10	.14	.11	.24	.23	.19	.21
他者否定	−.03	.11	.06	.06	.11	.15	.18	.14	.12	.19
還　元	−.06	.07	.18	.14	.16	.14	.19	.09	.03	.20
統　合	.10	.27	.04	.08	.07	.36	.43	.18	.17	.22

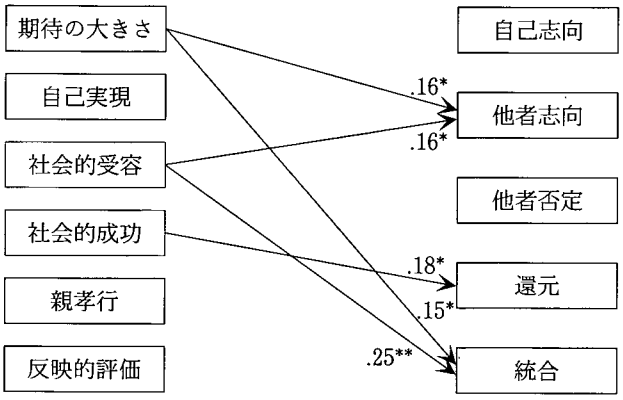
Table 3-7　母親の養育態度別の親からの期待認知と自己・他者志向的動機への態度の相関（韓国）

	母親高受容群（23点以上；216名）					母親低受容群（19点以下；194名）				
	自己実現	社会的受容	社会的成功	親孝行	反映的評価	自己実現	社会的受容	社会的成功	親孝行	反映的評価
自己志向	.12	.02	.13	.11	.12	−.08	−.02	.21	.21	.20
他者志向	−.01	.15	−.02	.06	.05	.05	.08	−.24	−.15	−.06
他者否定	.01	.10	.02	.07	.02	.20	.21	.12	.10	.19
還　元	−.04	.00	.23	.14	.15	.11	.12	.21	.06	.24
統　合	.18	.19	.02	.04	.14	.23	.34	.12	−.03	.23

れ以外に母親の受容性の低い群で「社会的受容」,「社会的成功」と「他者志向」の正の相関が認められた。韓国では，母親の受容性の低い群で「社会的成功」と「他者志向」に負の相関が認められ，社会的成功を期待されていると認知するほど，他者志向的動機を重視せず，自己志向的動機を重視していた。さらに受容性の低い群で親孝行や反映的評価を期待されていると認知するほど，自己志向的動機を重視する傾向が認められた（Table 3-6，Table 3-7）。

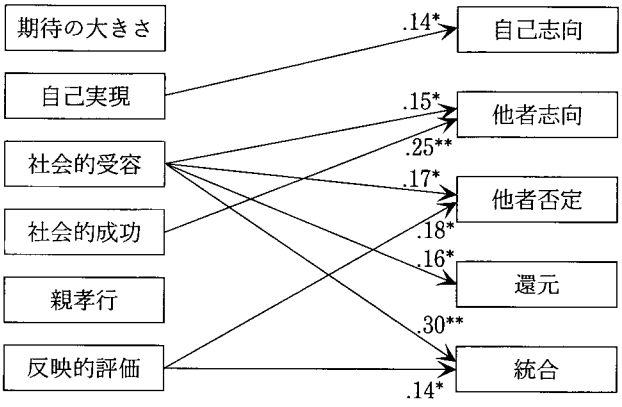
次に父親と母親の受容性の得点を合計して「親の受容性」とし，国別にこの得点に基づいて高・中・低の3群を構成し，高群と低群それぞれについて自己・他者志向的動機への態度の5つの下位尺度を目的変数，親や家族からの期待の大きさ，および親の期待の内容の5つの下位尺度を説明変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。

日本では，高受容群は，他者志向的動機に対する肯定的な態度を反映する「他者志向」と「統合」に「期待の大きさ」と「社会的受容」が影響を与えていた。親との関係が良好な場合には，対人関係に関する期待や親の期待を認知すること自体が他者志向的動機を促進すると解釈できる（Figure 3-1）。一方，低受容群でも「社会的受容」が「他者志向」と「統合」に影響を与えるという点は高受容群と共通していたが，「期待の大き



**p<.01　*p<.05

Figure 3-1　高受容群の重回帰分析の結果（日本）

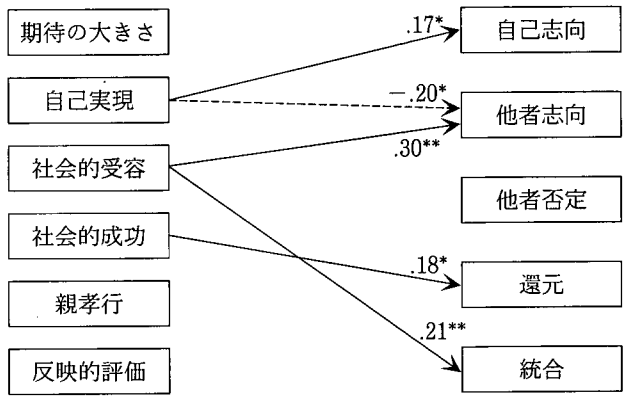


**p<.01　*p<.05

Figure 3-2　低受容群の重回帰分析の結果（日本）

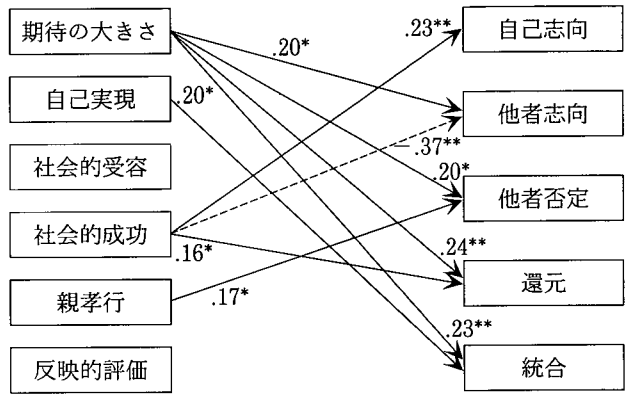
さ」は影響を与えていなかった。また「社会的受容」はある意味で他者志向的動機に対する否定的な態度を反映していると考えられる「他者否定」と「還元」にもパスが得られ，また親の「反映的評価」も「統合」と「他者否定」の双方にパスが得られていた。この結果は，親との関係が良好と言えない場合には親の「社会的受容」や「反映的評価」の期待が他者志向的動機に対してアンビバレントな態度を形成させることを示唆している（Figure 3-2）。

韓国では，高受容群は，日本と同様に「社会的受容」が「他者志向」と「統合」に影響を与えていた。また「自己実現」の期待は「自己志向」に正の影響を，「他者志向」に負の影響を与えており，「社会的成功」が「還元」影響を与えていた（Figure 3-3）。一方，低受容群では日本と異なり，「社会的受容」からのパスは全く得られず，「期待の大きさ」と「社会的成功」から多くのパスが引かれた。「期待の大きさ」は「他者志向」



**p<.01　*p<.05

Figure 3-3　高受容群の重回帰分析の結果（韓国）



**p<.01　*p<.05

Figure 3-4　低受容群の重回帰分析の結果（韓国）

と「統合」にも，「他者否定」と「還元」にも正の影響が認められ，親との関係が良好とは言えない場合には，大きな期待をかけられていると認知すると他者志向的動機に対してアンビバレントな態度が形成されることが示唆された。また「社会的成功」の期待は「自己志向」と「還元」に正の影響を，「他者志向」に負の影響を与えており，親との関係が良好とは言えない場合の親の「社会的成功」への期待が他者志向的動機の獲得を阻害することが示唆された（Figure 3-4）。

● 教師の期待の内容との関連

日本では，「統合」と教師の「交友関係」，「社会性」，「規範獲得」，「自己実現」といった直接授業とは関係のない期待との間に正の相関が認められた（Table 3-8）。一方，韓国でも「統合」と教師からの各期待認知の間に正の相関が認められたが，その大きさ

Table 3-8　教師からの期待認知と自己・他者志向的動機への態度の相関（日本）

	交友関係	成　績	社会性	マスタリー	規範獲得	自己実現
自己志向	−.04	.01	−.05	.01	−.02	−.01
他者志向	.17	.10	.19	.16	.10	.19
他者否定	.06	.08	.07	.05	.12	.05
還　元	−.06	.11	.00	−.03	−.01	−.05
統　合	.25	.17	.30	.19	.21	.24

Table 3-9　教師からの期待認知と自己・他者志向的動機への態度の相関（韓国）

	交友関係	成　績	社会性	マスタリー	規範獲得	自己実現
自己志向	−.03	.18	.03	.05	.16	−.03
他者志向	.19	−.08	.15	.06	.01	.13
他者否定	.13	.12	.13	.14	.20	.13
還　元	−.02	.23	.09	.06	.17	.03
統　合	.20	.13	.21	.16	.20	.16

Table 3-10　教師の受容性別の教師からの期待認知と自己・他者志向的動機への態度の相関（日本）

	教師高受容群（19点以上；279名）						教師低受容群（15点以下；241名）					
	交友関係	成績	社会性	マスタリー	規範獲得	自己実現	交友関係	成績	社会性	マスタリー	規範獲得	自己実現
自己志向	.11	.08	−.01	−.06	−.09	.06	−.10	−.13	−.15	−.07	−.06	−.15
他者志向	.08	.01	.07	.16	.12	.12	.17	.27	.14	.17	.17	.26
他者否定	.04	.04	.04	.04	−.03	.03	.14	−.03	.12	.03	.08	.02
還　元	.12	−.02	−.02	.03	−.10	.01	.21	−.03	.02	−.02	−.05	−.05
統　合	.12	.01	.10	.19	.16	.11	.27	.22	.25	.28	.21	.24

は日本より小さかった。また「成績」に対する期待と「還元」の間に正の相関が認められた（Table 3-9）。

親の場合と同様に，国別に教師の「受容性」得点に基づいて高・中・低の3群を構成し，高群と低群それぞれについて再度相関係数を算出し比較した。日本では，教師の受容性の認知が低い群にのみ大きな相関が認められた。特に「統合」はすべての期待の下位尺度と正の相関が認められた。また「成績」と「自己実現」は「他者志向」と正の相関が認められた（Table 3-10）。

韓国でも教師の受容性の認知が低い群にのみ大きな相関が認められた。特に「規範獲得」と「他者志向」，「社会性」と「他者否定」，「交友関係」と「還元」の間に正の相関が認められた（Table 3-11）。

Table 3-11　教師の受容性別の教師からの期待認知と自己・他者志向的動機への態度の相関（韓国）

	教師高受容群（18点以上；230名）						教師低受容群（15点以下；236名）					
	交友関係	成績	社会性	マスタリー	規範獲得	自己実現	交友関係	成績	社会性	マスタリー	規範獲得	自己実現
自己志向	.16	.08	.09	.07	.00	.02	.18	−.02	.20	−.02	−.06	−.05
他者志向	.01	−.04	−.01	.11	.05	.04	−.13	.13	−.02	.17	.27	.13
他者否定	.12	.17	.17	.17	.13	.19	.11	.05	.23	.06	.10	.03
還　元	.19	.10	.11	.09	.02	.10	.22	−.02	.16	.04	−.10	−.09
統　合	.04	.19	.10	.14	.15	.13	.11	−.03	.10	.10	.06	−.05

●達成目標志向性との関連

日本では，「マスタリー目標」，「遂行接近目標」「社会的承認目標」と「他者志向」，「他者否定」，「統合」の間に正の相関が認められた。特にマスタリー目標と社会的承認目標を保持している人ほど他者志向的動機を重視する傾向と，遂行接近目標を保持しているほど，自己・他者志向的動機を統合させて捉える傾向が強く認められた。

韓国では，「マスタリー目標」，「遂行接近目標」と「他者否定」，「還元」，「統合」の間に正の相関が認められた。特にマスターリー目標を保持している人ほど他者志向的動機を否定的に捉える傾向が日本より強く認められた。また遂行接近目標を保持している人ほど，他者志向的動機の否定的側面を認知して，自己・他者志向的動機を統合させて捉える傾向があり，こちらも日本より強く認められた。「社会的承認目標」は日本と同様に「他者志向」，「他者否定」，「統合」と正の相関が認められた。この他に「遂行回避目標」と「統合」の間にも正の相関が認められた（Table 3-12）。

●就業動機との関連

日韓の相関行列のパターンはかなり類似していた。他者志向的動機を重視する人ほど，あるいは自己・他者志向的動機を統合させて捉えている人ほど，社会に対する貢献や他

Table 3-12　達成目標志向性と自己・他者志向的動機への態度の相関

	日　本				韓　国			
	マスタリー目標	遂行接近目標	遂行回避目標	社会的承認目標	マスタリー目標	遂行接近目標	遂行回避目標	社会的承認目標
自己志向	−.02	−.01	.06	−.06	.03	.01	.01	−.07
他者志向	.29	.22	.14	.30	.14	.14	.10	.21
他者否定	.24	.21	.04	.21	.38	.31	.12	.23
還　元	.15	.20	.00	.15	.24	.28	.12	.14
統　合	.21	.25	.19	.23	.25	.34	.25	.25

Table 3-13　就業動機と自己・他者志向的動機への態度の相関

	日本					韓国				
	挑戦志向	貢献志向	対人志向	上位志向	評価志向	挑戦志向	貢献志向	対人志向	上位志向	評価志向
自己志向	.12	−.08	−.06	.06	−.13	.18	−.01	−.01	.14	−.07
他者志向	.06	.26	.25	.07	.30	.01	.16	.23	.11	.27
他者否定	.09	.12	.16	.12	.20	.06	.03	.05	.17	.19
還　元	.09	.05	.07	.14	.17	.19	.12	.09	.21	.17
統　合	.18	.38	.37	.10	.39	.23	.34	.41	.19	.44

者から評価される仕事を志向する傾向が強く，職業において対人関係を重視する傾向も強かった。また韓国では「挑戦志向」と「統合」の間にも正の相関が認められた(Table 3-13)。

考　察

日本では全体として他者からの期待を大きく認知している人が他者志向的動機を獲得しやすいという結果は得られなかったが，親からの受容性の低い群に限定するとそのような傾向があることが確認された。内容に関して言えば，親の「社会的受容」の期待が他者志向的動機の獲得や自己・他者志向的動機の統合を促す傾向が示唆された。この結果は先行研究の結果を確認するものであった。また「社会的成功」や「反映的評価」といったプレッシャーと結びつきやすいと考えられる親からの期待でもあっても他者志向的動機の獲得に結びついている可能性も示唆されたが，特にこれは両親の受容性の低い群で認められる傾向であった。受容性の低い群では「社会的受容」の期待が他者志向的動機に対する否定的な態度を反映している「他者否定」や「還元」にも影響を与えており，また親の「反映的評価」も「他者否定」と「統合」の双方に影響を与えていた。これらの結果は，受容性の低い群はその低さを埋めるために親の期待に応えようとして達成行動に従事している一方，他者志向的に達成行動に従事することにプレッシャーも感じやすく，アンビバレントな態度を形成させやすいのかもしれない。受容性の高い群では低い群と比較して関連は小さく，関係の良好な場合には自己・他者志向的動機への態度は親の期待以外の要因で決まる面が大きくなるのかもしれない。教師の期待でも授業とは直接関係がない側面の期待の高さが，特に受容性の低い群で「統合」と関連していた。

韓国では日本と対照的に，期待の大きさが他者志向的動機の獲得を促す傾向が，特に両親の受容性の低い群で確認された。社会的受容の期待を高く認知すると自己・他者志

向的動機を統合させるという傾向は日本と共通している。また社会的成功を期待されると「還元」的な態度が促進されることも日本の結果と一部共通している。一方，両親の受容性の低い群で社会的成功を期待されると，他者志向的動機ではなく自己志向的動機を獲得する傾向が認められた。この結果は，学業の競争的圧力の強い状況で，支持的でない親によって学業成績の上昇を強く期待されることによる反動や反発が生じたと解釈できる。また期待の大きさは他者志向的動機を促進する態度だけでなく，「他者否定」や「還元」といった他者志向的動機に対する否定的な態度にも正の影響を持つことが確認された。これは日本と同様に親との関係が良好でない場合に，親の期待が他者志向的な達成行動にアンビバレントな態度を生じさせることを示唆し，日本の結果と同様に親との関係性が他者志向的動機の獲得の調整変数として機能していることを示唆する結果と解釈できる。

達成目標志向性と自己・他者志向的動機への態度の相関のパターンは日韓で類似していたが，異なっている点に注目すると日本ではマスタリー目標が他者志向的動機を重視する傾向と，遂行接近目標が自己・他者志向的動機を統合する傾向と相関がやや高く，両目標が他者志向的動機の獲得と結びついていたのに対して，韓国ではマスタリー目標と遂行接近目標が他者志向的動機を否定的に認知する傾向と若干強く関連していた。教室場面でマスタリー目標志向性の高い学生がプレッシャーもまた高く認知しているという結果から，韓国の大学生が「マスタリー目標」を果たして本来の「マスタリー」の意味としてとらえていたかどうかの疑問が残る。

就業動機との関連の結果は日韓ともに共通しており，他者志向的動機を保持している，あるいは自己志向的動機と統合させている人ほど，社会貢献を含めて将来の職業の志向性においても「他者」の存在が重視されているという結果であり，先行研究を確認する結果であった。

第4章
韓国の学生と日本の学生における達成目標の差異

上淵　寿

問題の背景

●達成目標

達成動機づけ領域でよく研究されている達成目標（Ames, 1992）は感情，認知，学習，動機づけ，適応に影響することが指摘されている（Elliot, 1999)。達成目標の種類については複数の意見があるが，本研究では3種類の目標（マスタリー目標，遂行接近目標，遂行回避目標）を取り上げる（これらの目標の詳しい内容については，第5章を参考にされたい)。

●子どもの達成目標と親との関係

たとえばスポーツの領域をみてみよう。ソフトボールの女子選手（9〜11年生）を調査対象とした研究では，コーチの方針と共に，親が作り出す学習目標（マスタリー目標）を強調する風土が，選手のマスタリー目標の設定に正の影響を与えていた（Waldron & Krane, 2005)。また，小学生とその親を対象にした調査研究の結果，子どもの身体活動を活発化させるには，親の養育信念と子どもの達成目標をはじめとする動機づけ関連の変数が強い影響力をもっていた（Xiang et al., 2003)。

Papaioannou & Siskos（2008）は，中学生の体育に対する態度の変化を縦断的に追っているが，他の情意変数と同様に，マスタリー目標の低下，親へのネガティブ態度の増加を報告している。そのため，彼らは，情意変数の低下を防ぐための学習環境の整備を主張している。

こうした研究の流れからスポーツを始める非常に早い段階で，親やコーチが選手に与えるストレスや，他人との比較による相対評価をできるだけ減らすことが，既に提案されている（Roberts & Treasure, 1995; Roberts et al., 1994)。このように，親の作り出す風土が子どものスポーツへの動機づけ，特に達成目標の形成に影響を及ぼすことが様々な研究から示唆されている（White, 2007)。

スポーツ以外の教科学習においては，どうであろうか。小学生の達成目標への親からの影響を調べた研究では，算数（数学）について，小学生がもつ達成目標には，親や教師の達成目標に対する子どもの認知が影響を及ぼしていた（Friedel et al., 2007)。同様の知見が，中学生を対象に教科一般に尋ねた研究でも得られている（Yamauchi & Miki, 2000)。

さらに，韓国の高校生を対象とした研究では，親の自律性支援（あるいは統制）と生徒が認知した親のマスタリー目標が，生徒のマスタリー目標と関連があった（Kim et al., 2010)。年齢があがって，インドの高校生と大学生を対象とした研究でも，親の期待の認知が，生徒・学生の達成目標に影響するという知見が得られている。興味深いことに，大学生の方が高校生よりも，達成目標を重視していた（Singhal & Misra, 1994)。

ところで，同じ遂行目標でも，誇示の対象が異なると影響も違うようである。親ベースの遂行目標は，不適応的な動機づけや学習パターンと関連があった。ところが，仲間ベースの遂行目標は，むしろ適応的なパターンと関連がみられたのである（Ziegler et al., 2008)。不適応との関係でいえば，英才児（gifted）の不適応的な完全主義は，親の遂行目標との関連が見出されている（Abrad & Parker, 1997)。

さらに中高生を対象に，親の養育目標と子どもの達成目標の関連について縦断研究を行った例も存在する（Gonida et al., 2007)。特に，達成目標と親の影響に関する縦断研究としては，小中の移行期に焦点を当てたものもある（Duchesne & Ratelle, 2010)。その結果，親の自律性への関与が子どものマスタリー目標を促し，親の統制性が子どもの遂行目標を促進することが示された。

このように，親の養育と子どもの達成目標については一定の関連が見出されている。だが，親子関係が文化によって異なることは言うまでもない。親の養育と達成目標の発達について多文化間の比較研究もある（McInerney, 2008)。だが，まだまだ数が少ないのが現状である。

● 達成目標と文化差

さて，アジアの大学生を対象とした研究では，欧米の諸研究とはやや異なり，しばしばマスタリー目標だけではなく遂行目標も学業達成に関連することが指摘されている（Bernardo, 2008; Tao & Hong, 2000)。しかし，同じアジアの学生の間でも達成目標に違いはないのだろうか？

本研究では，同じ東アジア圏に属する二国間での達成目標の異同を精査する。そして，上記のレビューから，個人の属性としての達成目標の形成に親の関わりからの影響が大

きいと考える。ゆえに，学生の達成目標への親からの関わりについて検討する。

目　的

本研究の第1の目的は，韓国の学生と日本の学生の間にどのような達成目標の違いがあるかを検討することである。そして，第2の目的として，養育者（親等）の関わりが学生の設定する目標内容に影響するかを検討する。

結　果

達成目標の平均値は，いずれも日本の学生よりも韓国の学生の方が有意に高かった（掲載していない統計量については，第5章を参照; *t*-test, *ps*<.05)。

親の養育態度や親からの期待に関する平均値は，母親の自律性のみ，韓国の学生の方が日本の学生よりも有意に高かった（Table 4-1; *t*-test, *ps*<.05)。

次に，国別に親の養育態度と親からの期待の認知を説明変数として，4つの目標を基準変数とする重回帰分析を試みた。すると，母親の受容性と自律性から達成目標への影響は，韓国の学生と日本の学生でかなり異なっていた（Figure 4-1 と Figure 4-2 参照)。たとえば，母親の自律性が子どもの遂行回避目標に影響していたのは，日本だけだった

Table 4-1　韓国と日本の学生における各指標の基本統計量

	国	*N*	*M*	*SD*	α係数
父親の受容性	日本	660	4.41	1.13	.84
	韓国	515	4.57	1.15	.85
父親の自律性	日本	660	4.55	0.96	.70
	韓国	515	4.39	1.20	.80
母親の受容性	日本	660	4.96	0.94	.82
	韓国	515	5.09	0.94	.84
母親の自律性	日本	660	3.49	1.05	.75
	韓国	515	4.19	1.16	.75
家族の援助期待への認知	日本	660	3.52	0.95	.87
	韓国	515	4.15	0.87	.80
家族の協調・成長期待への認知	日本	660	4.78	0.75	.84
	韓国	515	5.12	0.67	.86
家族の成績期待への認知	日本	660	3.74	1.05	.65
	韓国	515	4.83	0.73	.60

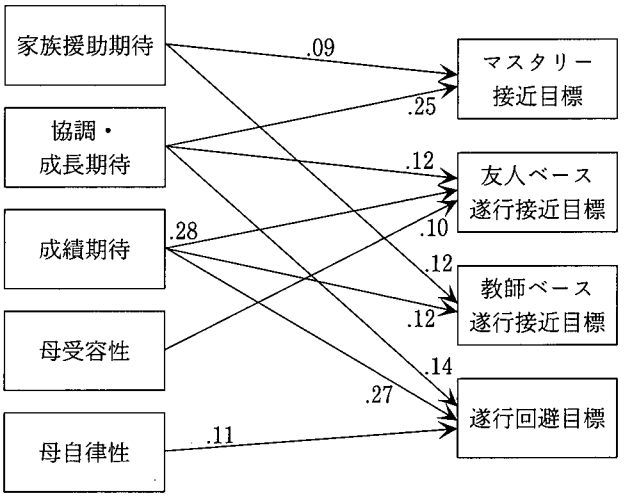


Figure 4-1　重回帰分析の結果（日本）

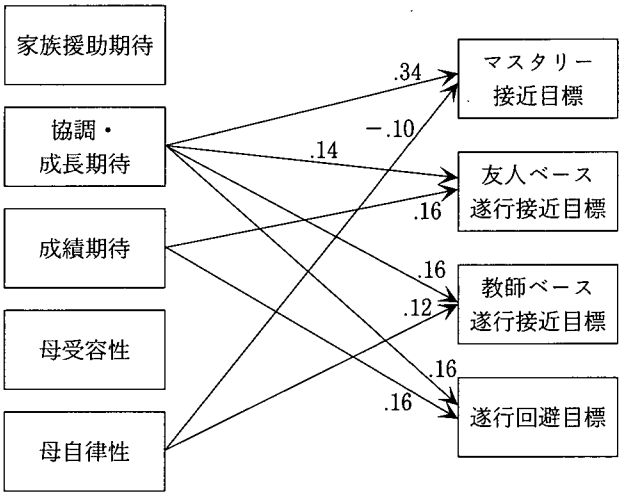


Figure 4-2　重回帰分析の結果（韓国）

(β=.11, t=2.26, p<.05)。

考　察

まず，達成目標得点の2国間の違いについて，産業発展の視座から検討した。現在の韓国は，日本よりも激しい競争社会だと考えられる。その競争に打ち勝つことで，韓国は今日の産業社会における重要国となったのであろう。また，競争社会であることと関係するが，韓国は能力主義（メリトクラシー）を強く打ち出している国とも言える。ゆ

えに，能力の成長や能力の表出が問題となる達成目標が，いずれも日本よりも韓国の方が高かったのではないかと考えられる。

次に達成目標への親からの影響である。先行研究と同様に，親から子どもの達成目標に影響関係が見出せた。

二国間で共通するのは，協調・成長への期待と成績への期待の2変数が主に達成目標に影響していた点である。特に協調・成長への期待は，遂行目標のみならずマスタリー目標にも影響していた。つまり，個人的な技能獲得の目標と考えられるマスタリー目標も，技能の表現・評価に関わる目標と考えられる遂行目標も，同様な個人の協調や成長への期待によって構成される可能性がある。このように考えると，個人対社会という視座でしばしば語られがちである，達成目標についての見方を改める必要があるかもしれない。

一方で，親の養育態度（受容・自律）から達成目標への影響は相対的に小さいものであった。さらに，韓国でのデータでは，母親の自律性から教師ベースの遂行接近目標が正の影響を与えていたのに対し，マスタリー目標には負の影響を与えていた。これはどのように解釈するべきだろうか。これらの結果は，先行研究から得られた知見とはかなり異なるのは否めない。ゆえに，少なくとも，親からの期待と親の養育態度について，新たに調査項目を加えた上で，精査する必要がある。また，今後考えるべきことは，社会構造，経済構造と個人のもつ心理的特性との関係についてのより詳細な検討であろう。

第5章
高校時代の教師からの期待が達成目標志向性に及ぼす影響の日韓比較
―教師の厳格さ，温かさの認知を調整要因とした検討―

藤井　勉

問題と目的

本章では，高等学校（以下，高校）時代の教師からの期待が達成目標志向性に及ぼす影響について日韓比較を行った結果を報告する。

何らかの課題や勉強に取り組む際に，個々人に設定される目標（ここでは達成目標志向性と呼ぶ）には数種類が仮定されうる。たとえば，自分自身の能力を伸ばすために勉強に取り組む者や，他者よりもよい成績を収めることを目指して勉強に取り組む者，他者より低い成績をとることを避けることを目指して勉強に取り組む者などがいる。彼らが取り組んでいる事象は等しく「勉強」であるが，その意味が異なることは想像に難くない。実際に，動機づけの達成目標理論（Dweck & Leggett, 1988）では，前述の類型に当てはまるような種類の目標が提唱されている。

たとえば，自分自身の能力を伸ばすことを目的として勉強に取り組む者は，「マスタリー目標志向性[1)]」が高いとされる。マスタリー目標志向性を持つ者は，たとえ困難な課題に直面したり，テストで低成績を収めたりしても，それを「今まで使用してきた学習方略とは異なる方略を用いた解決が求められている」という情報として解釈し，課題や勉強に対する動機づけの低下が少ない。失敗の原因は自身の努力不足に帰属されることが多く，比較的ポジティブな感情である後悔（e. g., もっと勉強に多くの時間を費やすべきだった）が生じやすい。多くの研究において，マスタリー目標志向性は内発的動機づけや自己効力，適応的な学習方略，課題への粘り強さなどとの相関が繰り返し得られており，一般に，この達成目標志向性は適応的なものであると解釈されている。

1）マスタリー目標は，この他にも習得目標，熟達目標，学習目標などと呼ばれるが，本章では近年，多くの研究で使用されており，一般的な呼称と考えられるマスタリー目標という呼称を使用する。これらの用語の使い分けは，上淵（2003）に詳しい。マスタリー目標に用語を統一するのは便宜上のことであり，上淵（2003）同様，他の用語を否定するものではないことを付け加えておく。

また，目標を設定する際に，マスタリー目標のように「自己」ではなく，「他者」が基準にされることもある。たとえば，他者よりもよい成績を収めることを目的として勉強や課題に取り組む場合，その学習者は「遂行接近目標志向性」が高いとされる。一方で，他者よりも低い成績をとることを避けようとする気持ちから勉強や課題へ取り組む場合，その学習者は「遂行回避目標志向性」が高いとされる。両者はどちらも「他者」を基準にするという点は共通しているが，特に遂行回避目標志向性の高い者は，困難な課題への直面や低成績を収めることを「自身の低い能力が露呈してしまった」という情報として解釈するため，ネガティブな感情が生じやすい[2)]。また，その後の課題への動機づけが低下しやすいという特徴がある。ゆえに，課題に回避的になりやすい遂行回避目標志向性を持つ者は，不適応的な学習方略を使用したり，失敗の原因を能力ではなく課題に帰属するために，自身の能力とはかけ離れた難易度の高い問題を選択したりすることも指摘されている[3)]。

実際に，これらの達成目標志向性と成績や内発的動機づけとの関連を検討したのが，Elliot & Church（1997）である。彼らは，達成動機づけや能力の期待，失敗の回避を第一水準，マスタリー目標と遂行接近目標，遂行回避目標を第二水準におき，第三水準に内発的動機づけと成績（Grade Point Average; GPA）を設定してパス解析を実施した。その結果，マスタリー目標は内発的動機づけと正の関連があり，遂行接近目標は成績との正の関連が認められた。その一方で，遂行回避目標は成績や内発的動機づけと負の関連が見られた。このことからも，遂行回避目標は，学習場面においてあまり望ましくない目標であることが示唆される。

ところで，達成目標志向性と成績やその他の変数との関連を調整すると考えられるのが，「他者からの期待」である。人としての成長や，よい成績を収めることを望む他者からの期待に応えようとして，勉強への動機づけが高まることも容易に予想されるためである。たとえば，多くの中学校や高校では，学期末の成績に大きく影響しうる中間テストや期末テストが実施される。その際，自身にとって身近な存在である両親や教師の期待の高さによって，勉強への動機づけが左右されるであろう。また，大学受験では両

2) 低成績の原因を，自身の努力よりも能力の不足に帰属する傾向がある（藤井・上淵，2010）ことからも，自身の能力と成績との関連が強いととらえていると考えられる。

3) 遂行接近目標は成績とは正の関連があるが，必ずしも適応的な目標とは言えないと指摘されている。たとえば，遂行接近目標は，自身のポジティブな経験に関わらず，他者を見下すことで有能感を得ようとする他者軽視傾向（速水，2006）との正の関連が認められている（藤井，2011）。この議論は本章で述べる内容とは異なるため，上記の指摘にとどめておく。

親の期待の他に，所属する高校の教師からの期待も動機づけに影響する変数となることが予想される。また，期待を受ける子どもも，両親や教師との関連性によって（i. e.，両親や教師をどのような人と見なしているかによって），受ける期待は異なる意味を持つと考えられる。

上記の議論を踏まえて，本章では，教師の厳格さ，温かさの認知を調整要因とし，教師の期待と達成目標志向性との関連を検討する。具体的には，教師が持つ期待の種類が，達成目標志向性に影響するというモデルを構築し，影響の程度を調べる。その際，教師のパーソナリティに関する指標として，厳格さの認知と温かさの認知を取り上げ，この2つの変数が，教師の期待から達成目標志向性への影響を調整する変数と仮定して分析を進める。

本研究で比較研究を行う対象である大韓民国（以下，韓国）は，近年の報道でもみられるように，大学受験に対する意識が高く，よりハイレベルな大学への入学が目標とされている[4]。ゆえに，勉強やテストに対する学生自身の動機づけが高く，同時に親や教師から受ける期待の認知も高いことが予想される。本章の報告者は実際に韓国で授業を実施しているが，テストや成績評価に関する説明を行う際に質問が多く，よい成績を収めることへの動機づけが高いことは経験レベルでは感じられるが，実際に差があるか否かは調査が必要である。また，日本でもハイレベルな大学への志向はみられるが，大学全入時代という表現にも象徴されるように，自身の能力で到達しうるレベルの設定水準は韓国と比して低いと思われる。本章では，このような予測が実証されるか否かを，大規模サンプルのデータをもとに検討する。

結　果

●下位尺度の構成

日本および韓国のデータの，高校の授業に対する達成目標志向性，教師の期待認知，高校時代の教師との関係の各尺度について，国ごとに因子分析（いずれも最尤法）を行った。いずれもスクリープロットや固有値の減衰状況，解釈可能性を吟味した上で因子数を決定した。

達成目標志向性尺度（Varimax 回転）は4因子が抽出されたため，因子ごとに合算平均点を求め，「マスタリー接近目標」「友人ベースの遂行接近目標」「教師ベースの遂

4）2011年9月の海外出張時，安平鎬教授（誠信女子大学校）への聞き取り調査も参考にしている。

Table 5-1　達成目標志向性尺度の因子分析結果

第1因子：友人ベース遂行目標
他の人と比べて良い成績をとることが重要だった
友人から一目置かれるようによい成績をとろうと思っていた
他の人より良い成績をとろうと思うとやる気が出た
よい成績をとって友人にかしこいと思われたかった
授業で，私は他の人よりもよい点数をとろうと思っていた
自分の能力を友人や指導者や家族などに示すために，授業で良い点数をとりたかった
授業で他の人よりも成績が良いならば，よくやったという気持ちになった
第2因子：マスタリー接近目標
授業から出来るだけ多くのことを知りたいと思っていた
授業を終える時，より広く深い知識を得ていたいと思っていた
授業の内容を，出来るだけ徹底的に理解することが重要だった
授業で紹介された教材を完璧にマスターしたかった
授業では，難解なものであったとしても，私の好奇心が刺激される教材を好んでいた
第3因子：教師ベース遂行目標
先生にほめてもらうためによい成績をとりたかった
先生に喜んでもらえるようによい成績をとろうと思っていた
先生に認めてほしいので一生懸命勉強していた
第4因子：遂行回避目標
授業で悪い成績をとってしまうのではないかと心配していた
授業で成績が悪かったらどうしようとよく考えていた
とにかく授業で悪い成績をとりたくなかった
授業で成績が悪いことへの不安が，私を勉強に駆り立てていた

行接近目標」「遂行回避目標」の4下位尺度を構成した。具体的な項目をTable 5-1に示す。教師の期待認知尺度（Varimax回転）は3因子が抽出されたため，因子ごとに合算平均点を求め「協調・成長期待の認知」「成績期待の認知」「規範遵守期待の認知」の3下位尺度を構成した。具体的な項目をTable 5-2に示す。教師との関係尺度（Varimax回転）は2因子が抽出されたため，因子ごとに合算平均点を求め「厳格さの認知」「温かさの認知」の2下位尺度を構成した。具体的な項目をTable 5-3に示す。

● 各下位尺度の相関係数・記述統計量

各尺度間の相関係数と記述統計量をTable 5-4，5-5に示す。

いずれの尺度においても，内的一貫性の指標として算出したCronbachのα係数は比較的高い値をとっており，尺度の内的一貫性は確保されたと判断した。

Table 5-2　教師の期待認知尺度の因子分析結果

第1因子：協調・成長期待の認知
自分を大切にしてほしい
人のために何かできる人になってほしい
夢をもち続けてほしい
人と仲良くなってほしい
善悪の判断ができる人になってほしい
自分の得意なことを見つけてほしい
親しい友達をつくってほしい
社会に役に立つ人になってほしい
新しいことを吸収してほしい
人と協力してほしい
勉強することの楽しさを知ってほしい
みんなと楽しんでほしい
授業の内容に興味をもってほしい
第2因子：成績期待の認知
偏差値を上げてほしい
よい成績をとってほしい
有名な大学に行ってほしい
第3因子：規範遵守期待の認知
校則をきちんと守ってほしい
ルールを守ってほしい

Table 5-3　教師との関係認知尺度の因子分析結果

第1因子：温かさの認知
私の話をよく聞いてくれた
私をほめてくれたり，励ましたりしてくれた
悩んでいるときに相談に乗ってくれた
わからないところがあるとわかるまで教えてくれた
第2因子：厳格さの認知
普段の生活態度に干渉して細かく言っていた
規則に厳格だった
生徒の行動をコントロールしようとしていた
生徒が間違ったことをしたり，悪いことをすると厳し叱った

注）韓国のデータにおいて，「普段の生活態度に干渉して細かく言っていた」は2つの因子に対して十分な因子負荷を示さなかったため，除外した。

Table 5-4　各尺度間の相関係数・記述統計量（日本データ）

	協調・成長期待	成績期待	規範遵守期待	友人ベース遂行接近	教師ベース遂行接近	マスタリー接近	遂行回避	温かさの認知	厳格さの認知	*M*	*SD*
協調・成長期待	.93	.24	.33	.23	.23	.36	.24	.57	.16	4.50	0.88
成績期待	708	.81	.35	.24	.15	.19	.23	.09*	.27	4.44	1.08
規範遵守期待	708	719	.81	.10	.10	.12	.16	.12	.63	4.43	1.25
友人ベース遂行接近	705	715	716	.91	.48	.33	.48	.18	.11	3.92	1.18
教師ベース遂行接近	704	715	716	717	.90	.34	.41	.29	.12	2.45	1.28
マスタリー	702	712	713	713	713	.81	.34	.32	.10	3.45	1.00
遂行回避	704	715	716	716	716	713	.82	.18	.17	3.69	1.21
温かさの認知	704	714	715	711	711	708	711	.89	.13	4.24	1.14
厳格さの認知	705	716	717	713	713	710	713	715	.82	3.67	1.20

注）＊印を付した箇所は5%水準で有意，それ以外の相関係数は全て1%水準で有意であった。表中の同じ尺度が交差する箇所は，その尺度のα係数を記載し，左下部分は分析に用いたデータ数を記載した。

Table 5-5　各尺度間の相関係数・記述統計量（韓国データ）

	協調・成長期待	成績期待	規範遵守期待	友人ベース遂行接近	教師ベース遂行接近	マスタリー接近	遂行回避	温かさの認知	厳格さの認知	*M*	*SD*
協調・成長期待	.93	.12	.09	.19	.26	.30	.21	.53	.01†	4.37	0.89
成績期待	546	.74	.43	.29	.10*	.26	.31	.07†	.33	4.98	0.85
規範遵守期待	545	558	.84	.16	.08	.23	.24	.12	.54	4.91	0.97
友人ベース遂行接近	542	556	556	.88	.56	.33	.60	.16	.14	4.38	0.97
教師ベース遂行接近	542	556	555	553	.91	.32	.29	.26	.10*	3.19	1.37
マスタリー	544	558	557	555	555	.80	.36	.25	.17	4.17	0.95
遂行回避	542	556	555	553	553	555	.83	.16	.18	4.56	1.01
温かさの認知	541	555	554	552	552	554	552	.88	.18	4.07	1.14
厳格さの認知	543	557	556	554	554	556	554	554	.69	4.30	0.94

注）†を付した箇所は，相関係数が有意ではなかった。また＊印を付した箇所は5%水準で有意であり，それ以外の相関係数は全て1%水準で有意であった。表中の同じ尺度が交差する箇所は，その尺度のα係数を記載し，左下部分は分析に用いたデータ数を記載した。

●教師の厳格さ・温かさの認知における群分けと分析

（a）　日本

教師の厳格さと温かさの認知について，それぞれの平均値（厳格さの認知，温かさの認知の順に3.67，4.24）に基づき高・低群に分割した。それぞれの場合について，達成目標志向性を従属変数，教師の期待認知を独立変数とした重回帰分析を行った。Figure 5-1，5-2は順に厳格さの認知低群，高群の分析結果であり，Figure 5-3，5-4は順に温かさの認知低群，高群の分析結果である。教師の厳格さや温かさの認知の高低に関わらず，協調・成長期待の認知はマスタリー接近目標と教師ベースの遂行接近目標に正の影響を及ぼしていた。ただし，友人ベースの遂行接近目標や遂行回避目標への影響は一様ではなく，温かさの認知が高い場合は，協調・成長期待の認知は友人ベースの

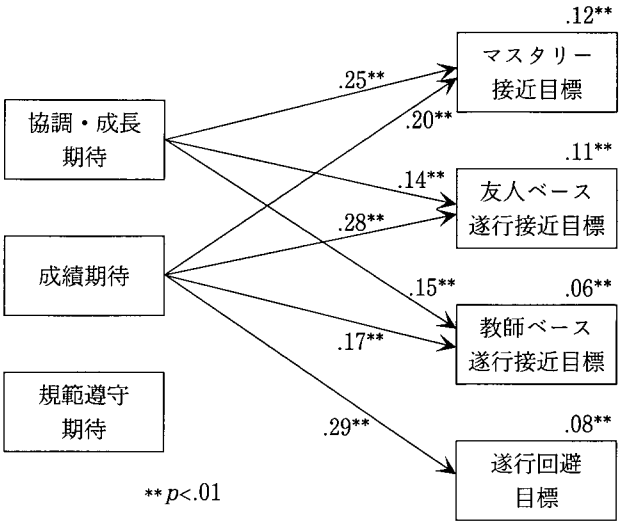


Figure 5-1　厳格さの認知低群の重回帰分析結果（日本）

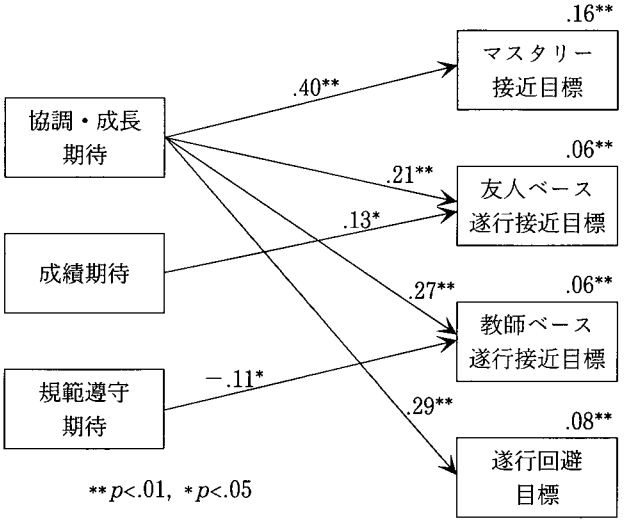


Figure 5-2　厳格さの認知高群の重回帰分析結果（日本）

遂行接近目標への影響が見られず，厳格さの認知が低い場合は，協調・成長期待の認知は遂行回避目標に影響を及ぼしていなかった。また，成績期待の認知は，厳格さの認知が低い場合，また温かさの認知が高い場合にマスタリー接近目標に正の影響を及ぼしていた。加えて，規範遵守期待の認知は，教師の厳格さの認知が高い場合にのみ，教師ベースの遂行接近目標へ弱い負の影響を及ぼしていた。

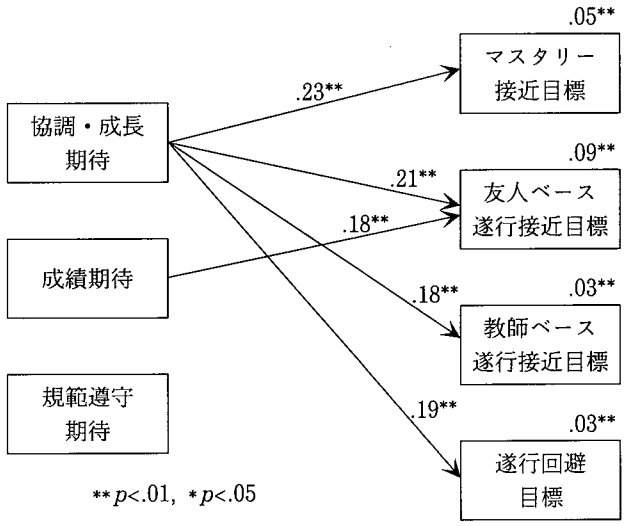


Figure 5-3　温かさの認知低群の重回帰分析結果（日本）

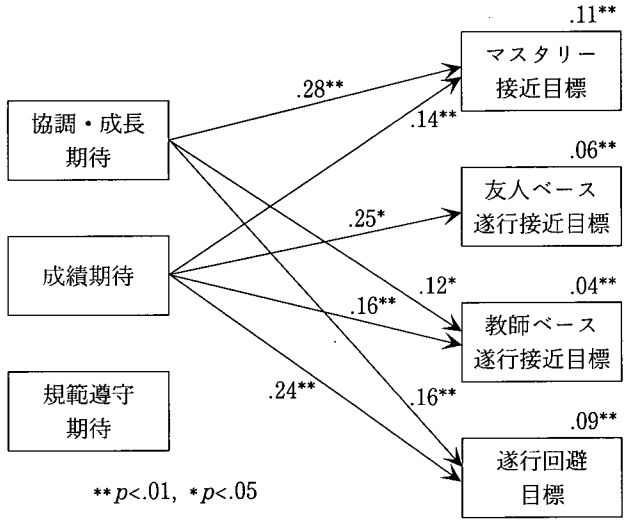


Figure 5-4　温かさの認知高群の重回帰分析結果（日本）

（b）　韓国

前述の分析と同様に，教師の厳格さと温かさの認知について，それぞれの平均値（厳格さの認知，温かさの認知の順に 4.07，4.30）に基づき高・低群に分割した。それぞれの場合について，達成目標志向性を従属変数，教師の期待認知を独立変数とした重回帰分析を行った。Figure 5-5，5-6 は順に厳格さの認知低群，高群の分析結果であり，Figure 5-7，5-8 は順に温かさの認知低群，高群の分析結果である。日本と同様の点は，教師の厳格さや温かさの認知の高低に関わらず，協調・成長期待の認知がマスタリー接

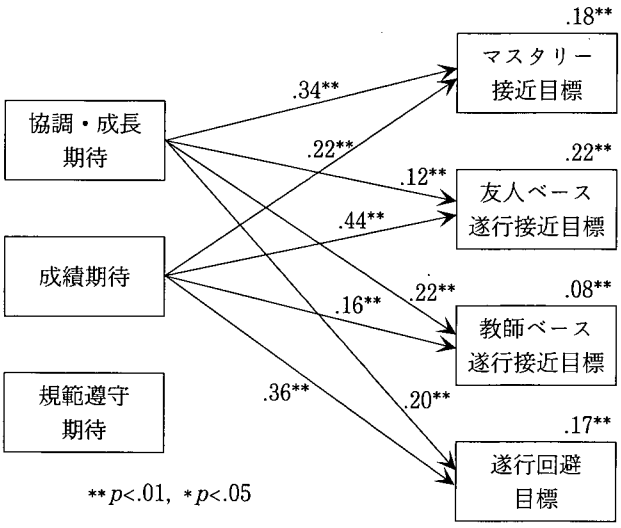


Figure 5-5　厳格さの認知低群の重回帰分析結果（韓国）

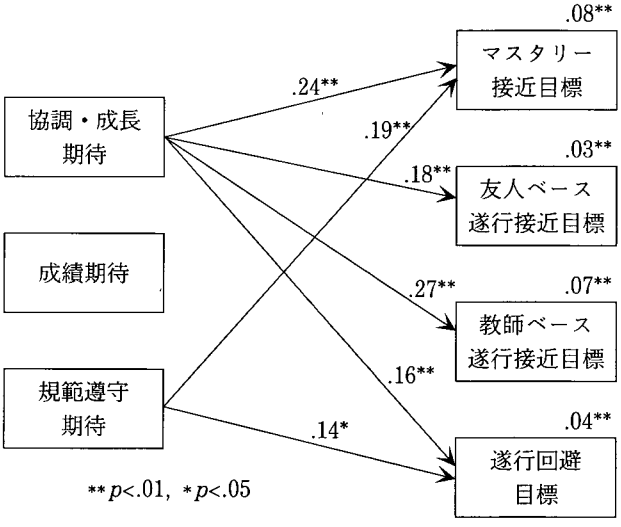


Figure 5-6　厳格さの認知高群の重回帰分析結果（韓国）

近目標と教師ベースの遂行接近目標に正の影響を及ぼしていたことである。ただし，遂行回避目標への影響は一様ではなく，温かさの認知が低い場合は，協調・成長期待の認知は影響を及ぼしていなかった。また，成績期待の認知は，厳格さの認知が低い場合にマスタリー接近目標へ正の影響を及ぼしていた点は日本と共通であった。しかし，温かさの認知が低い場合に，成績期待の認知からマスタリー接近目標への正の影響が有意であり，この点は日本と一致していなかった。規範遵守期待の認知から達成目標志向性への影響がほぼ見られない点は日本と共通であったが，教師の厳格さの認知が高い場合に，

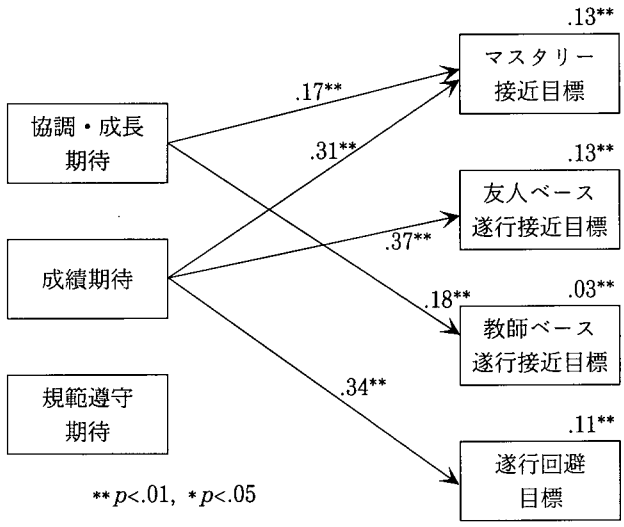


Figure 5-7　温かさの認知低群の重回帰分析結果（韓国）

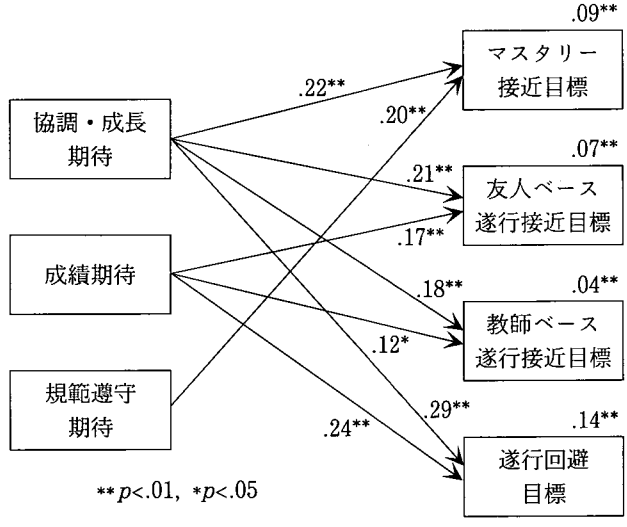


Figure 5-8　温かさの認知高群の重回帰分析結果（韓国）

マスタリー接近目標と遂行回避目標へ正の影響を及ぼしており，また温かさの認知が高い場合に，マスタリー接近目標への影響が有意であった。この点は日本の分析結果と異なるものであった。

● 各尺度の平均値差の検定

本研究で得られた各尺度の平均値を求め，国ごとに有意な差が見られるか否かを検討した。対応のない t 検定を実施したところ，いずれの平均値の差も有意であり（$ts>$

Table 5-6　各尺度の平均値差の検定結果

	日本		韓国		検定結果
	N	*M*	*N*	*M*	
協調・成長期待	708	4.50	546	4.37	日＞韓
成績期待	719	4.44	560	4.98	日＜韓
規範遵守期待	720	4.43	559	4.91	日＜韓
マスタリー接近	717	3.45	559	4.17	日＜韓
友人ベース遂行接近	720	3.92	557	4.38	日＜韓
教師ベース遂行接近	720	2.45	557	3.19	日＜韓
遂行回避	720	3.69	557	4.56	日＜韓
温かさの認知	716	4.24	556	4.07	日＞韓
厳格さの認知	718	3.67	558	4.30	日＜韓

注）厳格さの認知のみ日韓で1項目異なるが，その他は全て同じ項目で下位尺度を構成した。

2.61, *ps*<.01)，協調・成長期待尺度と温かさの認知尺度の平均値は日本の方が有意に高く，それ以外はすべて韓国の平均値が有意に高かった（Table 5-6)。

考　察

日韓において，達成目標志向性を従属変数，教師からの期待の認知を独立変数とした重回帰分析を行った。その結果，日韓ともに，教師の厳格さの認知や温かさの認知によって群分けを行って分析した際，独立変数から従属変数への影響が異なることが確認された。ゆえに，教師との関係性の認知は，教師の期待の認知が達成目標志向性へ与える影響を調整している可能性が示された。

このように調整効果があったこと自体は日韓共通の結果であるが，その効果は国ごとに異なる様相を見せている。たとえば，顕著な違いは規範遵守期待の認知からの影響であろう。日本では，厳格さの認知が高い場合のみ，教師ベースの遂行接近目標に対し負の影響を及ぼしていた。一方，韓国では厳格さの認知の認知が高い場合に，マスタリー接近目標と遂行回避目標に正の影響を及ぼし，温かさの認知が高い場合に，マスタリー接近目標への正の影響が有意であった。

本研究で使用した尺度の平均値は，いずれも日韓で異なっていた。協調・成長期待の認知，および温かさの認知は日本の方が有意に高かったが，その他の尺度得点は全て韓国の方が高いという結果がみられた。成績や規範遵守に対する期待の認知が韓国の方が高いことは首肯できるものであろう。それゆえに，種々の目標の得点も高められていると考えられる。また，温かさの認知は日本の方が高い傾向にあった。換言すれば韓国の

方が温かさの認知の平均値が低いことになるが，この点は厳格さの認知が韓国の方が高いことと整合すると思われる。

重回帰分析および平均値の差の検定の結果をまとめて解釈すると，日本と韓国という2つの国を比較した際，教師による成績や規範遵守の期待の認知が韓国の方が高く，それゆえに学業への動機づけと関連した達成目標志向性への影響も日韓で異なるものになったと考えられる。ゆえに，冒頭で立てた，韓国の学生の方が教師からの期待の認知や学業の動機づけと関わる達成目標志向性の得点が高いのではないか，という仮説は，概ね支持されたと考えられる。

達成目標志向性は，マスタリー－遂行の一次元ではなく，接近－回避の軸も組み合わせた概念化がなされている（Elliot & McGregor, 2001; Elliot & Thrash, 2002）。また，単一の目標のみならず，複数の目標が同時に個人内に存在する可能性もある。本研究のデータにおける達成目標志向性の各尺度の平均値を見ると，韓国ではどの目標志向性の平均値も日本より高く，教師ベースの遂行接近目標以外ではすべて理論的中央値（3.5）を大きく上回っていた。本研究のデータのみをもって文化的背景への過度の考察を行うのは慎むべきではあるが，少なくとも学業に関する動機づけは，日本より韓国の方が高いと考えてよいのではないだろうか。ただし，冒頭で「あまり望ましくない」目標である可能性を述べた遂行回避目標も，日本より韓国の方が平均値が高い結果であった。遂行回避目標はネガティブなパーソナリティや学習行動の関連が指摘されていることから（e.g., 藤井, 2011），日韓ともに実際の学習行動と諸変数との関係がどのようなものか，というレベルまで深化させた研究も今後必要であると思われる。

第6章
大学生の対人関係と動機づけに関する日韓比較
―就業動機はどのように規定されるのか―

大家まゆみ

問題と目的

大学生が将来，どのような職業に就きたいと考えているのか，すなわち就業動機はどのように形成されるのだろうか。

大学生は職業的発達段階の探索段階の後期にあたる（Super, 1957)。Super はキャリア発達段階を5つの段階に分け，成長段階（0～14歳)，探索段階（15～25歳)，確立段階（25～45歳)，維持段階（45～65歳)，解放段階（65歳～）とした。そして，各々の段階で達成すべき課題を乗り越えることによって，人は職業を通して発達していくとした（Super, 1957)。このように彼のキャリア発達理論は，それぞれの発達段階で人が出会う心理社会的危機を乗り越え，克服した後に人生の幸せがやってくるというエリクソンの発達課題論に基づいている。このうちの探索段階は青年期に該当し，さまざまな社会的役割を実践しながら，進路選択や職業決定を行う大切な時期と位置付けられている。

青年期の進路選択に関する研究には，若林らの職業社会化過程理論がある（若林・和田・中村・斉藤，1986)。この理論では，大学生が就職に際して職業人としての規範や行動様式を内在化させていくには，職業社会化過程が必要であるという。また職業社会化過程の構造は3段階で構成される。第1段階は，職業を選択していく過程を外的に規定している諸要因である。例えば，高校や短期大学，専門学校，そして大学や大学院などの進学先の種類や特徴，専門分野，家庭の状況，両親の教育水準や職業，個人の特性や生活などが外的な規定要因である。次に，職業社会化に関する学校での経験を通じて，職業選択に関する自己概念の確立と，そして職業意識を形成していくプロセスそのものが第2段階である。自己概念は発達や臨床など様々な心理学の分野で扱われる心理的概念であるが，Super が定義した自己概念とは，個人が自分自身をどのように感じているか等，自分の価値，興味，能力について個人の経験を統合して構築されていく概念であり，この自己概念を職業に置き換えることが職業を決定する上で重要であるという（Super,

1963)。この自己概念，さらには職業についての興味，どのような職業に就きたいと考えているかという将来展望，すなわち職業志向が統合されるプロセスで，職業意識が形成されていく。さらに第3段階で，職業社会化の過程としての職業選択がなされる。職業を選択するとは，実際の職業に結びつく活動を行うことであり，免許や資格取得，職業・会社の選択という具体的で目に見える目標を設定して，その目標を達成していくことになる。しかし，職業社会化過程の第2段階のプロセスにおいて，学生時代の知識・技能の習得，学内外の活動の充実感，さまざまな対人関係への経験といった職業社会化経験が少ないと，自己概念や職業意識の形成が希薄になり，就職活動がはじまる時期や進路決定を行わなければならない時期になっても積極的な行動を行うことができないことが多い（Gordon, 1998)。

安達（1998）によれば，就業動機とはまだ就職していない者が将来の仕事に関してもつ動機，または将来携わる職業的場面を想定した動機である。安達は就業動機測定尺度を作成し，尺度項目を因子分析した結果に基づいて，就業動機が次の4つの下位構造から構成されると仮定した（安達，1998)。

安達によれば，(1) 探索志向は，仕事に関連する情報の収集や，知識・技術を習得したいという動機づけであり，次に (2) 挑戦志向は，困難な作業を独自の力でやり遂げたいという動機づけであり，(3) 上位志向は社会的地位や名声を得ようとする動機づけであり，最後に (4) 対人志向は，仕事を通した他者との関わりを重視したいという動機づけであり，就業動機はこの4つの下位構造から成るとした（安達，1998)。

その後，安達（2004）は理科系大学1年生を対象に大学選択動機と入学後の適応を検討した際，因子分析の結果，就業動機尺度を探索志向と挑戦志向が1つにまとまった自己向上志向，対人志向，上位志向の3因子に分類しなおした。そのため，本研究では安達（2004）をもとに，就業動機尺度は3因子から構成されるものと仮定する。

青年期においては，高校時代の授業に対する動機づけが，大学に入ってからの将来に対するビジョン，すなわち就職に対する意識に影響を及ぼしていると考えられる。しかしこれまで，高校と大学を結ぶ発達段階に焦点を当てて，大学生の就業動機を検討した例はほとんどない。特に，高校の授業に対する達成目標志向性が，大学生の就業動機に及ぼす影響についてとりあげた研究はほとんど見られない。そこで本研究では，高校の授業に対する達成目標志向性が，大学生の就業動機に及ぼす影響について検討することを第一の目的とする。

また，比較文化的な視点から日本と韓国の大学生の心理の違いをとらえることを，本研究の第二の目的とする。日本と韓国は，地理的あるいは歴史的な関係から，きわめて

似通った文化であるものの，日本と韓国の文化には，数々の相違点がある（池田，2006; Smith & Bond, 1998）。日本の特徴として，しばしば“甘え”が挙げられる（土井，1971; Smith & Bond, 1998）。Smith らによれば，甘えとは寛大さを伴う依存関係であり，社会で生きていく上で極めて親密な信頼関係を築いていくことを指す（池田，2006）。また池田は，例えば「親分―子分」「売り子」など，日本語には他人同士の関係性を表す上で親子関係を意味する言葉を使うことが多いと指摘した。

一方で Smith & Bond（1998）によると，韓国は儒教の影響を強く受けているため，他者との対人関係を築く際に「家族関係（family-based relationship）」を意識しているという。このように各々異なる独自の文化にありながらも，よく似ている両国の風土からは，日韓比較研究を行うことによって，異なる結果が得られると同時に，類似の傾向が見られると予測できる。

結　果

● 下位尺度の構成

本研究では，就業動機尺度と高校の授業に対する達成目標志向性を扱う。就業動機尺度は就業動機尺度（安達，1998, 2001）より，「困難な仕事でも人に助けを借りずに自分の力でやり遂げたい」などの自己向上志向の項目，「仕事を通じて色々な人に出会いたい」などの対人志向の項目，「周りから賞賛されるような仕事をしたい」などの上位志向の項目等 15 項目を使用した。なお安達（1998, 2001）は 5 段階評定だが，本研究では他の尺度に合わせて 6 段階評定とした。日本および韓国のデータの各尺度について，国ごとに因子分析（いずれも最小 2 乗法）を行った。いずれもスクリープロットや固有値の減衰状況，解釈可能性を吟味した上で因子数を決定した。

以下，日本と韓国の国別に就業動機尺度の因子分析結果を示し，次に全体（日本および韓国）の就業動機尺度の因子分析結果を示し，考察する。高校の授業に対する達成目標志向性は，第 5 章を参照してほしい。

● 就業動機尺度の日韓比較

（a）　日本

日本の大学生を対象にして，就業動機尺度（一般化された最小 2 乗法，プロマックス回転）15 項目のうち，因子負荷量が .30 以下だった 2 項目を除く 13 項目を因子分析した結果，3 因子が抽出された。因子ごとに合計点を求め「社会貢献志向」（α =.81），

Table 6-1　日本人大学生の就業動機尺度

質　問　項　目	因子1	因子2	因子3
社会に貢献できるような職業に就きたい	.94	−.02	.01
世の中の役に立つような仕事がしたい	.84	−.04	.02
社会的に有意義な仕事がしたい	.75	.05	.09
職場では周りの人々との調和が何よりも大切だ	.33	.19	−.07
給料のよい職業に就くことは充実した生活に欠かせない	.06	.81	−.26
昇格や昇進の機会がある仕事を得ることは重要だ	.08	.75	−.07
職場では高い役職に就きたい	−.17	.66	.32
家族に喜んでもらえるような職業に就きたい	.27	.36	.06
努力や能力を必要とする仕事がしたい	.11	−.21	.80
仕事で成功するためには決して努力を惜しまない	.00	−.02	.72
周りから賞賛されるような仕事をしたい	−.04	.26	.53
みんなに期待されるような仕事がしたい	.18	.15	.47
困難な仕事でも人に助けを借りずに自分の力でやり遂げたい	.01	−.09	.32

因子抽出法：一般化された最小2乗法（プロマックス法）

「上位志向」（α =.74），「努力・承認志向」（α =.72），の3下位尺度を構成した（Table 6-1）。

（b）　韓国

韓国の大学生を対象にして，就業動機尺度（一般化された最小2乗法，プロマックス回転）15項目のうち，因子負荷量が.30以下だった1項目および2つの因子に高い因子負荷量を示した1項目を除く13項目を因子分析した結果，3因子が抽出された。因

Table 6-2　韓国人大学生の就業動機尺度

質　問　項　目	因子1	因子2	因子3
社会に貢献できるような職業に就きたい	.93	.00	−.09
社会的に有意義な仕事がしたい	.91	.00	−.02
世の中の役に立つような仕事がしたい	.78	−.18	.13
努力や能力を必要とする仕事がしたい	.53	.10	.05
給料のよい職業に就くことは充実した生活に欠かせない	−.21	.82	−.04
職場では高い役職に就きたい	.03	.76	−.03
昇格や昇進の機会がある仕事を得ることは重要だ	−.11	.76	.07
みんなに期待されるような仕事がしたい	.21	.61	.08
家族に喜んでもらえるような職業に就きたい	.19	.50	−.07
周りから賞賛されるような仕事をしたい	.24	.49	.10
仕事を通じて色々な人に出会いたい	.01	−.08	.95
常に多くの人との出会いがある仕事がしたい	−.01	.08	.77
職場では周りの人々との調和が何よりも大切だ	.06	.04	.54

因子抽出法：一般化された最小2乗法（プロマックス回転）

Table 6-3　日韓大学生の就業動機尺度

質　問　項　目	因子1	因子2	因子3
社会に貢献できるような職業に就きたい	.82	−.14	.14
世の中の役に立つような仕事がしたい	.76	−.19	.16
社会的に有意義な仕事がしたい	.69	−.08	.24
努力や能力を必要とする仕事がしたい	.66	.07	−.02
仕事で成功するためには決して努力を惜しまない	.55	.26	−.09
困難な仕事でも人に助けを借りずに自分の力でやり遂げたい	.43	.05	−.29
職場では高い役職に就きたい	.12	.78	−.11
給料のよい職業に就くことは充実した生活に欠かせない	−.20	.72	.07
昇格や昇進の機会がある仕事を得ることは重要だ	−.11	.69	.17
周りから賞賛されるような仕事をしたい	.34	.44	.01
家族に喜んでもらえるような職業に就きたい	.32	.39	−.04
みんなに期待されるような仕事がしたい	.29	.36	.18
常に多くの人との出会いがある仕事がしたい	−.15	.09	.87
仕事を通じて色々な人に出会いたい	−.04	.01	.87
職場では周りの人々との調和が何よりも大切だ	.14	.13	.28

因子抽出法：一般化された最小二乗法（プロマックス法）

子ごとに合計点を求め「社会貢献・努力志向」（α =.86），「上位・承認志向」（α =.84），「対人志向」（α =.80），の3つの下位尺度を構成した（Table 6-2）。

（c）　全体（日本および韓国）

日本と韓国の大学生の双方を含めた全体を対象にして，就業動機尺度（一般化された最小2乗法，プロマックス回転）15項目を因子分析した結果，3因子が抽出された。因子ごとに合計点を求め「社会貢献・努力志向」（α =.86），「上位・承認志向」（α =.84），「対人志向」（α =.80），の3つの下位尺度を構成した（Table 6-3）。

● 各下位尺度の相関係数・記述統計量

就業動機および高校の授業に対する達成目標志向性の各々の下位尺度間の相関係数と記述統計量を Table 6-4，6-5 に示す。

（1）　就業志向動機

日韓のいずれも，内的一貫性の指標として算出した Cronbach の α 係数は比較的高い値であり，尺度の内的一貫性は確保されたと判断した。一方で，日本と韓国では因子分析の結果，それぞれ3因子が抽出されたものの，各因子の構成がそれぞれ異なっていた。日本は「社会貢献志向」（α =.81），「上位志向」（α =.74），「努力・承認志向」（α =.72）であり，韓国は「社会貢献志向」（α =.86），「上位・承認志向」（α =.84），「対人

Table 6-4　各尺度間の相関係数・記述統計量（日本）

	社会貢献志向	上位志向	努力・承認志向	友人ベース遂行目標	マスタリー接近目標	教師ベース遂行目標	遂行回避目標	*M*	*SD*
社会貢献志向	.81	.37	.57	.20	.30	.15	.21	18.55	3.74
上位志向	725	.74	.48	.42	.17	.19	.22	17.16	3.69
努力・承認志向	721	722	.72	.30	.31	.20	.09＊	21.01	3.94
友人ベース遂行目標	718	719	716	.91	.33	.48	.48	27.47	8.24
マスタリー接近目標	715	716	713	713	.90	.34	.34	17.25	5.02
教師ベース遂行目標	718	719	716	717	713	.81	.41	7.36	3.85
遂行回避目標	718	719	716	716	713	716	.82	14.76	4.86

注）＊印を付した箇所は5%水準で有意，それ以外の相関係数は全て1%水準で有意であった。また，表中の同じ尺度が交差する箇所は，その尺度のα係数を記載し，左下部分は分析に用いたデータ数を記載した。

Table 6-5　各尺度間の相関係数・記述統計量（韓国）

	社会貢献・努力志向	上位・承認志向	対人志向	友人ベース遂行目標	マスタリー接近目標	教師ベース遂行目標	遂行回避目標	*M*	*SD*
社会貢献・努力志向	.86	.44	.54	.20	.43	.07†	.22	19.48	3.49
上位・承認志向	552	.84	.52	.49	.24	.26	.32	27.73	5.14
対人志向	554	554	.80	.20	.24	.19	.13	13.92	2.85
友人ベース遂行目標	551	551	554	.88	.33	.56	.60	30.66	6.82
マスタリー接近目標	553	554	555	555	.91	.32	.36	20.85	4.73
教師ベース遂行目標	551	551	553	553	555	.80	.29	9.56	4.11
遂行回避目標	552	551	553	553	555	553	.83	18.23	4.03

注）†を付した箇所は，相関係数が有意ではなかった。それ以外の相関係数は全て1%水準で有意であった。また，表中の同じ尺度が交差する箇所は，その尺度のα係数を記載し，左下部分は分析に用いたデータ数を記載した。

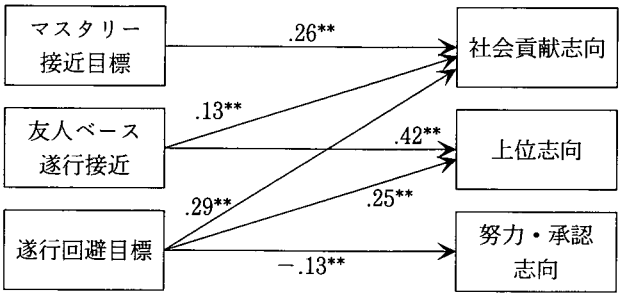
志向」（α＝.80），の3つの下位尺度を構成した（Table 6-4, 6-5）。この差異については，考察の部分で詳しく述べる。

（2）　高校の授業に対する達成目標志向性

高校の授業に対する達成目標志向性尺度（一般化された最小2乗法，プロマックス回転）は，「友人ベースの遂行接近目標」「教師ベースの遂行接近目標」「マスタリー接近目標」「遂行回避目標」の4下位尺度を構成した（順にα＝.91, .83, .81, .82；詳しくは第5章を参照）。

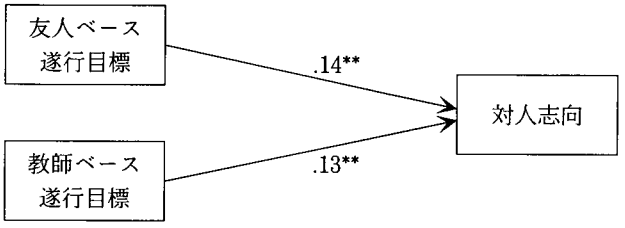
●高校の授業に対する達成目標志向性が現在の就業動機に及ぼす影響

高校の授業に対する達成目標志向性が現在の就業動機に及ぼす影響を検討するため，国別に就業動機を従属変数，高校の授業に対する達成目標志向性を独立変数とした重回帰分析を行った（Figure 6-1, 6-2）。なお，ここでは日本と韓国の就業動機については，それぞれTable 6-1とTable 6-2を用いた。すなわち，日韓で国別に就業動機を因子分



** p<.01

Figure 6-1　日本の大学生の重回帰分析の結果



** p<.01

Figure 6-2　韓国の大学生の重回帰分析の結果

析した結果を各々用いて分析した。

（a）　日本

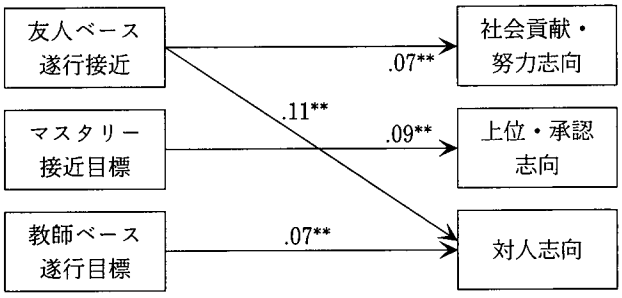
Figure 6-1 は日本の分析結果である。マスタリー接近目標は社会貢献志向に正の影響を及ぼしていた。また，友人ベースの遂行接近目標は社会貢献志向と上位志向に正の影響を及ぼしていた。また遂行回避目標は，社会貢献志向と上位志向に正の影響を，努力・承認志向には弱い負の影響を及ぼしていた。一方，教師ベースの遂行接近目標は就業動機には何ら影響を及ぼしていなかった。日本の大学生の就業動機には，高校時代の教師に対する達成目標志向性は影響していないと考えらえる。

（b）韓国

Figure 6-2 は韓国の分析結果である。マスタリー接近目標と接近回避目標は，どの就業動機にも有意な影響を及ぼしていなかった。友人ベースの遂行接近目標と教師ベースの遂行接近目標は各々，対人志向に弱い正の影響を及ぼしていた。一方，日本とは異なり，就業動機の社会貢献・努力志向と上位・承認志向は，高校の授業に対する達成目標志向性の影響を有意に受けていなかった。

（c）　全体

高校の授業に対する達成目標志向性が現在の就業動機に及ぼす影響を日韓を合わせた



**p<.01, *p<.05

Figure 6-3　日韓（全体）の大学生の重回帰分析

全体で検討するため，就業動機を従属変数，高校の授業に対する達成目標志向性を独立変数とした重回帰分析を行った（Figure 6-3）。なお，ここでの就業動機については，Table 6-3 を用いた。すなわち，日韓を合わせた全体の就業動機を因子分析した結果を用いて分析した。

マスタリー接近目標は上位・承認志向に弱い正の影響を及ぼしていた。また，友人ベースの遂行接近目標は社会貢献・努力志向と対人志向に弱い正の影響を及ぼしていた。また教師ベースの遂行接近目標は対人志向に弱い正の影響を及ぼしていた。一方，遂行回避目標は，就業動機には何ら影響を及ぼしていなかった。

考　察

本研究では，高校の授業に対する達成目標志向性が，大学生の就業動機に及ぼす影響について検討した。

以下，就業動機尺度について，日本および韓国，そして日本と韓国を合わせた全体データの分析結果について考察する。

まず，日本の大学生を対象に調査した結果，就業動機尺度は 3 因子が抽出された。因子ごとに合計点を求め「社会貢献志向」，「上位志向」，「努力・承認志向」の 3 下位尺度を構成した。次に，韓国の大学生を対象に調査した結果，就業動機尺度は日本と同様に 3 因子が抽出され，「社会貢献・努力志向」，「上位・承認志向」，「対人志向」の 3 つの下位尺度を構成した。さらに，日本と韓国の大学生の双方を含めた全体の調査を分析した結果，就業動機尺度は日本および韓国同様に，3 因子が抽出された。因子ごとに合計点を求め「社会貢献・努力志向」，「上位・承認志向」，「対人志向」の 3 つの下位尺度を構成した。日本，韓国，そして日本と韓国の双方を含めた全体の調査を分析した結果は，

それぞれ安達（2001）が作成した就業動機尺度の3因子モデルと多少異なる下位尺度項目の構成であったが，3因子に分かれた点では一致するものであった。

日韓の大学生の就業動機を比較する観点からは，このように日本と韓国では，就業動機尺度の因子構造はそれぞれ3因子と同数であったものの，下位釈度を構成する項目の内容が少し異なっていた。

特に，日本の大学生のみを対象とした調査では，韓国の第三因子「対人志向」が抽出されなかった。このことについては，趙・松本・木村（2011）が心理学的手法を用いて日韓の大学生の文化比較を行った研究の中で指摘したように，日本と韓国の対人関係の距離の保ち方が異なり，対人関係の在り方に関する言葉も日本と韓国では異なることが背景にあると思われる。趙らは，日本人は職場や仲間など「外」の人間関係を重視するのに対して，韓国人は家族や親族など，血縁関係のある，つまり「内」の人間関係を重視すること，さらには韓国語には，「自分と他者の関係の境界線が明確ではなくなるほどの親密さ」を意味する言葉があるのに対し，日本語にはそのような言葉がないことを明らかにした（趙・松本・木村，2011）。

このことをふまえると，日本の大学生の就業動機には「対人志向」が単独の因子としては見いだされず，韓国の大学生の就業動機の第三因子として「対人志向」が抽出されたことについては，単なる偶然という訳ではなく，対人関係を家族関係と同様に重要視する韓国の文化が反映されていると考えても，矛盾はないだろう。

また，高校の授業に対する達成目標志向性が大学生の就業動機に与える影響について，重回帰分析の結果から省察する。日本の大学生の場合，「友人ベースの遂行目標」は「社会貢献志向」と「上位志向」に正の影響を及ぼしていたが，韓国の大学生の場合，「友人ベースの遂行目標」は「対人志向」のみに正の影響を及ぼしていた。すなわち日本では，高校時代の「友人ベースの遂行目標」は社会に貢献したい，仲間の中で上位に存在したいという就業動機づけに影響を及ぼしていた。一方で韓国では，社会という大きな枠組みの中でのスケールの大きな人間関係よりも，より近く親しい人間関係を形成したいという動機や，新しい人との出会いに期待する対人動機に対して，高校時代の友人ベースの遂行目標が影響を及ぼしていたといえるだろう。

さらに，日本の大学生の場合，就業動機に対する「教師ベースの遂行目標」の影響は有意ではなく，「マスタリー遂行目標」と「遂行回避目標」の正の影響があったのに対し，韓国の大学生の場合，就業動機の中でも「対人志向」に対してのみ，「教師ベースの遂行目標」の正の影響があった。高校時代の「友人ベースの遂行目標」は日本と韓国の大学生の双方の就業動機に正の影響を及ぼしていたが，他の変数に関しては，有意な

影響を及ぼしていた独立変数も従属変数も異なっていた。今後，なぜこのような違いが生じたのかについては追跡調査を行う等，追究していく必要があろう。

一方で，日本と韓国の大学生を含めた全体の結果を分析したところ，「社会貢献・努力志向」と「対人志向」に対して「友人ベースの遂行目標」が正の影響を及ぼしていた。全体の結果の分析からは，偏回帰係数の値が小さいことから，あまり断定的なことはいえない。今後，データサンプル数を増やしたり，調査項目を見直したりする等，新たな知見を得るために，さらなる調査を続けていくことが必要になるだろう。

引用文献

Ablard, K. E., & Parker, W. D. (1997). Parents' achievement goals and perfectionism in their academically talented children. *Journal of Youth and Adolescence*, **26**, 651-667.

安達智子 (1998). 大学生の就業動機測定の試み　実験社会心理学研究, **38**, 172-182.

安達智子 (2004). 理科系大学1年生の大学選択動機と入学後の適応について：就業動機志向による比較　進路指導研究, **19**, 22-29.

Ames, C. (1992). Classrooms: Goals, structures, and student motivation. *Journal of Educational Psychology*, **84**, 261-271.

東洋 (1994). 日本人のしつけと教育一発達の日米比較にもとづいて　東京大学出版会

Bernardo, A. B. I. (2008). Individual and social dimensions of Filipino students' achievement goals. *International Journal of Psychology*, **43**, 886-891.

趙善英・松本芳之・木村裕. (2011). 回想された親の養育行動が大学生の自尊感情に及ぼす影響の日韓比較：行動分析学的な解釈　社会心理学研究, **27**, 1-12.

土井健郎 (1971).「甘え」の構造　弘文堂.

Duchesne, S., & Ratelle, C. (2010). Parental behaviors and adolescents' achievement goals at the beginning of middle school: Emotional problems as potential mediators. *Journal of Educational Psychology*, **102**, 497-507.

Dweck, C. S., & Leggett, E. L. (1988). A social-cognitive approach to motivation and personality. *Psychological Review*, **95**, 256-273.

Elliot, A. J. (1999). Approach and avoidance motivation and achievement goals. *Educational Psychologist*, **34**, 149-169.

Elliot, A. J., & Church, M. A. (1997). A hierarchical model of approach and avoidance achievement motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 218-232.

Elliot, A. J., & McGregor, H. A. (2001). A 2×2 achievement goal framework. *Journal of Personality and Social Psychology*, **80**, 501-519.

Elliot, A. J., & Thrash, T. M. (2002). Approach-avoidance motivation in personality: Approach and avoidance temperaments and goals. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 804-818.

Friedel, J. M., Cortina, K. S., Tunrner, J. C., & Midgley, C. (2007). Achievement goals, efficacy beliefs and coping strategies in mathematics: The roles of peceived parent and teacher goal emphases. *Contemporary Educational Psychology*, **32**, 434-458.

藤井勉 (2011). 達成目標志向性と他者軽視傾向の関連　日本教育心理学会第53回総会発表論文集, 237.

藤井勉・上淵寿 (2010). 潜在連合テストを用いた暗黙の知能観の査定と信頼性・妥当性の検討　教育心理学研究, **58**, 263-274.

Gonida, E. N., Kiosseoglou, G., & Voulala, K. (2007). Perceptions of parent goals and their contribution to student achievement goal orientation and engagement in the classroom: Grade-level differences across adolescence. European *Journal of Psychology of Education*, **22**, 23-39.

Gordon. V. N. (1998). Career decidedness types: A literature review. *Journal of Career*

Assessment, **4**, 219-244.

速水敏彦（2006）. 他人を見下す若者たち　講談社

池田満（2006）. 大学生の心理的コミュニティ感覚：日本と韓国の異文化間比較国際基督教大学学報 I-A 教育研究, **48**, 151-160.

伊藤忠弘（2009）. 自己・他者志向的動機と就業動機の関係　日本心理学会第 73 回大会発表論文集, 1020.

伊藤忠弘（2010）. 他者志向的達成動機の規定因としての親の養育態度と期待　青山心理学研究, **10**, 1-16.

伊藤忠弘（2011）. 他者志向的達成動機と親からの期待ー自己志向的動機と他者志向的動機の関連づけに影響する要因の検討ー　日本教育心理学会第 53 回総会発表論文集, 93.

伊藤忠弘（2012）. 努力は自分のためならず　他者志向的動機　鹿毛雅治（編）モティベーションをまなぶ 12 の理論　金剛出版　pp. 101-134.

Iyengar, S. S., & Lepper, M. (1999). Rethinking the value of choice: A cultural perspective on intrinsic motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 349-366.

河村照美（2003）. 親からの期待と青年の完全主義傾向との関連　九州大学心理学研究, **4**, 101-110.

Kim, J. I., Schallert, D. L., & Kim, M. (2010). An integrative cultural view of achievement motivation: Parental and classroom predictors of children's goal orientations when learning mathematics in Korea. *Journal of Educational Psychology*, **102**, 418-437.

Leondari, A., & Gonida, E. N. (2008). Adolescents' possible selves, achievement goal orientations, and academic achievement. *Hellenic Journal of Psychology*, **5**, 179-198.

McInerney, D. M. (2008). Personal investment, culture and learning: Insights into school achievement across Anglo, Aboriginal, Asian and Lebanese students in Australia. *International Journal of Psychology*, **43**, 870-879.

小川雅美（1994）. 不安神経症患者と両親の養育態度の関連　東京女子医科大学雑誌, **64**, 418-423.

Papaioannou, A. G., & Siskos, B. N. (2008). Changes in achievement goals and self-concept in the early months of junior high school. *Psychological Reports*, **103**, 745-763.

Roberts, G. C., & Treasure, D. C. (1995). Achievement goals, motivational climate and achievement strategies and behaviors in sport. *International Journal of Sport Psychology*, **26**, 64-80.

Roberts, G. C., Treasure, D. C., & Hall, H. K. (1994). Parental goal orientation and beliefs about the competitive-sport experience of their child. *Journal of Applied Social Psychology*, **24**, 631-645.

Singhal, R., & Misra, G. (1994). Achievement goals: A situational-contextual analysis. International *Journal of Intercultural Relations*, **18**, 239-258.

Smith, P. B., & Bond, M. H. (1998). *Social psychology across cultures* 2nd ed. Hemel Hempstead, UK: Prentice Hall.

Super, D. E. (1957). *The psychology of careers: An introduction to vocational development.* New York: Haper & Brothers.（スーパー, D. E. 日本職業指導学会（訳）(1960). 職業生活の心理学ー職業経歴と職業的発達ー　誠信書房).

Super, D. E. (1963). Self-concepts in vocational development. In D. E. Super, R. Starishevsky, N. Maltin, & J. P. Jordan (Eds.), *Career development:Self-concept theory*. New York: College

Entrance Examination Board, pp. 17-32.

田中あゆみ・藤田哲也 (2003). 大学生の達成目標と授業評価, 学業遂行の関連　日本教育工学雑誌, **27**, 397-403.

Tao, V., & Hong, Y. (2000). A meaning system approach to Chinese students' achievement goals. Journal of Psychology in the Chinese Societies, **1**, 13-38.

上淵寿 (2003). 達成目標理論の展望ーその初期理論の実際と理論的系譜ー心理学評論, **46**, 392-401.

若林満・和田実・中村雅彦・斉藤和志 (1986). 東海地区国立大学新入生の進路意識に関する研究　名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), **33**, 247-278.

Waldron, J. J., & Krane, V. (2005). Motivational climate and goal orientation in adolescent female softball players. *Journal of Sport Behavior*, **28**, 378-391.

White, S. A. (2007). Parent-created motivational climate. In S. Jowette & D. Lavallee (Eds.), *Social Psychology in Sport*. Champaign, IL US: Human Kinetics. pp. 131-143.

Xiang, P., McBride, R., & Bruene, A. (2003). Relations of parents' beliefs to children's motivation in an elementary physical education running program. *Journal of Teaching in Physical Education*, **22**, 410-425.

Yamauchi, H., & Miki, K. (2000). Effects of students' perception of teachers' and parents' attitudes on their achievement goals and learning strategies. *Psychologia: An International Journal of Psychology in the Orient*, **43**, 188-198.

Ziegler, A., Dresel, M., & Stoeger, H. (2008). Addressees of performance goals. *Journal of Educational Psychology*, **100**, 643-654.